
告って！

クレパス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告って！

【Nコード】

N9343N

【作者名】

クレパス

【あらすじ】

学校でも可愛いと評判の芹香がついに恋に目覚めた。

相手は、制服を着崩すことなく、ノンフレームの眼鏡の奥の瞳が見真面目そうにみえる山科健吾君。

女は度胸！有言実行あるのみよ！告白のメッカ、階段の踊り場で向かい合った。

この恋の行方をどうか見守って！

散って。。。。 S 1

少し、アイライナーが濃かったかしら？

コテで巻いた髪の毛も左右のバランスが悪い気がする。
眉だっていつもより、少し太いぞ。

ああ、どうしようー！！

でも、朝のテレビの占いは

「恋の告白はうまくいくでしょう」

笑顔で女子アナが伝えていたし、雑誌の星占いも今日がラブ運最高
！と載っていた。

「山科君！」

眉間にしわを寄せて、振り向いたのは、やせ気味で長身2つ隣のク
ラスの山科健吾君だ。

放課後の廊下はちょうど、人通りが途絶えて、運も味方しているみ
たい。

「あの、少し、時間ありますか？」

上目づかいではかなげな笑顔を作った。

「何？」

「ここでは……」

「俺、時間あんまりないんだけど。」

「すぐに終わるから」

最北の階段の踊り場で向かい合った。

この階段は、グラウンドからも、校門からも一番遠く、
普段使いとしては、まったく敬遠されていて、

もっばら、告白のメツカとして、利用されているの。

「山科君。好きです」

女は度胸！とばかりに一気に気持ちを伝えたわ。

目を丸くした、山科君は気を取り直すと

「これ、びつくり？」

「違います！」

「じゃ、よくある罰ゲーム？」

「それも違います！」

頭をかきながら、

「あー、悪い。俺彼女いるから。」

女に生れて17年と5カ月。

ゴールデンウィーク明けの五月晴れの下。

初めての告白が無残にも散った。

肩を落とし、クラスに戻ると親友いや、悪友の由利が笑いながら聞いてきた。

「聞いてほしい？」

友達がいのない奴だ。

なんで笑ってるの？

「それ、どういことよ！」

「だって、玉砕は目に見えてたからね」

まだ、笑ってる。

「どうしてよ？」

「山科に彼女がいるの知らなかったのは、芹ぐらいよ」「思わず地団太をふんだ。」

「知ってたら教えてよ！」

「知ってたら、告白しなかった？」

「・・・・・・・・」

「ほらね」

由利が自分の事をよくわかってくれているのは、充分に分かっているわよ。

でも、人の玉砕を楽しげにしているのは、どういふことよ？

「でも、みんな楽しんでたとしか思えない！」

由利はやつと笑うのをやめた

「違うんだって。芹がやつと男に目覚めたかと喜んでいたのよ。まさか、こんなにすぐに告白するとは、思っていなかったの」「

確かに！

みんなが心配するくらい、私は、色恋ごとに興味がなかった。毎日の生活で精いっぱいだったんだもの。

「だって、思ったことはすぐに伝えないと！」

「はいはい、芹の主義主張はわかってるよ」

そうよ！いつでも伝えられるなんて思ってたやいけないの。思っていることは今、その場で口に出して、行動しなきゃ！有言実行あるのみよ！

「彼女が何だっというのよ。。。」「

「は？」

「彼女の一人や二人が何だっというのよ！」

「え！ちよっと、芹・・・」

そうよ！まだ、山科君は私のこの想いを分かっていないわ！
伝えなきゃ！

「まだ、終わってないわ！」

「な！待ちなさい。みつともないことは、やめときなよ！」

「みつともない？どこが？」

「だって、振られたんだよ」

「ふん！一回や二回振られたからって諦めたら、そんだけのもと
しか思ってもらえないじゃない」

「いやいや、だからって……」

腰に両手をあて、両足を肩幅に広げて踏ん張った

「まだ、はじまつたばかりだってば！」

由利が口をあんぐりと開けたままなのをみて、

『さっきのお返しよ』とばかりに

にんまりと、笑ってやった。

散らして。。。。K1

片平芹香。

クリンとした目をより大きく見せたいのか、
グルグルと黒いペンで目の周りをなぞっている。

髪を染めるのは禁止のはずなのに、
何気に茶髪な気がする。

それをいつもクルンクルンさせている。
スカートは今はやりの短い丈で、それを気にすることなく
ひらひらと前を歩いている。

「好きです！」

おっどろいた!!!!!!

今まで全くといって、接点がなかった……と思う。

学校でも可愛い部類に入るだろう。

男の中では、彼女にしたいリストの上位にいつも上がってくる。
でも、俺はご遠慮申し上げたい。

タイプじゃない。

あんな、キャピキャピで、派手派手な女は苦手だ。

とりあえず、お断りさせて頂こう。

「あーーーー、悪い。俺彼女いるから。」

わあーーーー、驚きのあまり、目がこぼれそうだ！
でも、俺に彼女がいること知らなかったのか？

告る前に事前調査はしなかったのか？

普通なら誰か止めるだろう！てか、止めるよ！

もしかしたら、友達がいらないのか？

いやいや、おぼろげながら、彼女がキャラキャラと

女友達とけたたましく、廊下を歩く姿を何度も目撃している。

気落ちしたように、去って行く後ろ姿を見ながら、

俺はまだ、「ビックリです！！」とか言っつて、悪友が顔を出したりしないかと

きよるきよるあたりを伺ってしまった。

告白のメツカと言われる階段を後にし、

帰ろうかと廊下をあるいていると、

「健吾！」

「絵里」

「今から帰るの？」

「ああ」

「先生に頼まれた仕事してたら、こんな時間になったけど、

私は今から部活よ。」

「大変だな」

「部長だから仕方ないわ。コンクールが近いもの」

俺の彼女の絵里は吹奏楽部の部長だ。

コンクールを目前に控え、燃えている。

俺たちは、最近、うまくかみ合っていない。

なんだか、ちぐはぐして、会話も続かない。

会えない日が続いているだけが理由ではないと思う。

半年前に絵里から告白されて、付き合い始めた。

何となくいいかなと思って、OKした。
デートもした。

キスもした。

もちろん、それ以上の事だつて。。。。

まあ、こんなもんだらうといった付き合い方だつた。

「じゃあ、また、メールするね」

絵里があっさりとかけて行つた。

その後ろ姿を見て、なぜか、片平の後ろ姿を思い出した。

少しだけ胸が痛んだ。

待ち伏せして。。。。S2

山科君は、帰宅部だ。

HRが終わるなり、校門までダッシュして待ち伏せしてやった。少し汗ばんでくるこの季節なのに、唯一、学ランの一番上のホックだけは緩めているが、着崩すことなく、肩から、カバンをななめがけにして歩いてくる。やっぱり、真面目なんだな。

ノンフレームの眼鏡が、より一層まじめさを引き立たせて、線の細い体、ピンと伸びた背筋は、神経質な印象を与えていると思う。

普通なら、敬遠してしまうかな？

身長は180?を少し、超えたぐらい。

ちょっと、私には、高すぎる。

周りに彼女の影を探したが、見当たらなかった。やった!

今日は、一人で帰るみたい。

またもや、恋の神様が味方している!

山科君の前に立ちはだかるように進み出た。誰か、ダン!と効果音を流してよ!

「山科君!」

「!」

「一人?」

「あ！ああ・・・」

「一緒に帰らない？」

「俺、彼女いるって昨日言ったよね」

「それが？同級生なんだもん。帰りが同じだったら、一緒に帰ってもおかしくないわよ」

「・・・」

「山科君は電車でしょ。駅は向こうだよ」

「・・・」

「ほら、早く、早く」

山科君は呆れてものが言えないのか、何も言わずに私の前を素通りしていった。

「ちよつと、待って！」

156?の私とでは、一步の歩幅が当然のように違う。息を切らせながら、必死で後をついて行って、話しかけたの。

「ねえ、担任の田中先生って、HRは、いつもあんなに長いのか？」

「今日の体育、4時間目だったでしょ。お腹すかなかった？」

「美術の課題何にした？」

どの質問にも、一切答えてくれない。

いや、もしかしたら聞こえていないのかもしれない。

だって、追いつこうとして、息が切れて、まともに言葉が言えてなかったもの。

ハアハア、苦しい！

でも、ここで諦めてなるものか！

「ちょっと、待って！」

「……………」

「待ってってば！」

ハアハア……、息が切れて、もう追いつけない。

大声をだして、余計しんどくなったじゃない！

とりあえず、今日はこの辺でやめておこう。

思わず立ち止り、膝に手を置きかがんでしまった。

せっかくきれいにカールできたのに、髪の毛がボサボサだ。

アイライナーが汗でにじんで、パンダ目になっていなきやいいけど、鏡で確認してからじゃないと顔があげれない。

山科君は、息一つ乱さずスタスタと歩いて行ってしまった。

くそ！

自分の体力のなさを嘆くわ。

明日から、夜のジョギングはじめないと。。。。！

待ち伏せされて。。。 K2

おお、びっくりした！

なんでこんなところに仁王立ちしてるんだ！

まさか、待ち伏せか？
女ストーカーか？

片平は悪びれもせずにつこり笑って
「一緒に帰らない？」

いや、敵ながらあつぱれ！と一昔前の人ならいったかも・・・
昨日の衝撃からもはや立ち直ったみたいだ。

変な屁理屈をこねられた。

もう、無視だ。無視するしかない！

仁王立ちの横をするりと通り過ぎ、
いつもより意識して、大股で歩き始めた。

183?の俺に比べて片平は20?以上は小さい。
したがって足の長さも比例するように短い。

男どもの中には、

「あれぐらいの背の方が、身長差があつて、歩いていて絵になるんだ」

なぐんで頭の中で妄想しているのか、うつとりしている。
アホか、お前は！ カレカノでもない癖に！

片平は息を切らせながら、必死でついてくる。
健気にも、荒い気で話しかけてくる。

「ねえ、担任の田中先生って、HRは、い……………」
最後まで聞こえねえつつうの！

「今日の体育、4時間目だった……………かった？」
途中を抜かすとわかんねえだろ！

「……………題何にした？」
何が何したんだって？

どの言葉も、息が上がってまともな話になっていない。
何を聞いてきているかわかんねえから、答えられねえし、
こっちから聞き返してやるのも変なものだ。

息遣いがハアハアからゼーゼーへと変わりそうな感じだ。

俺は、歩調を緩めることなく、どんどん歩いていった。
幸いにも、片平は体力なしみたいだ。

距離が開いてきているのが、息遣いが聞こえる大きさでわかる。

最後にやっと聞こえたのは、

「待ってってば！」

以外にもというか、やっぱりというか

勇ましい！あの、可愛い顔で勇ましすぎるだろう。

俺は、思わず笑ってしまった。

振り向くのは危険かと思ったが、
もしかして、貧血でも起こして倒れていないかと心配になった。

チラッと振り向くと、遠くで、膝に手をついて、肩で息をしていた。
茶色の髪の毛が顔を覆っていて、表情は見えない。

俺は思わず、

「貞子みたいだ」

自分の思考に大いに笑った。

拒否られて。。。 S 3

最近は夜のジヨギングが功を奏したのか、
一緒に歩いていても、あまり、息が上がらなくなってきたわ。
(あくまでも、あ・ま・り・よ！)

校門の待ち伏せも、日常行事の一環として、
頭にインパクトさせることに成功したのか、
山科君は校門で私をみても、驚かなくなった。
こっちの質問にもそっけないけど、ほろほろと返してくれるように
なった！
これは嬉しことなのだけど、彼の驚いた顔を見れなくなったのが、
ちよい残念！

そこで、驚きの次の一手よ！
ふふん、今日はお手製のお弁当の差し入れよ！

4時間目の体育の授業の終わりに、一人で歩いているところを捕獲
作戦大成！。

「山科君！」

「！」

「これっ！」

山科君がどれくらい食欲が分からないから、
大きな2段弁当にしたの。

受け取りやすいように、スタバの紙袋でカモフラージュもしたわよ！

「何？」

「受け取って！」

「だから、何？」

「……お弁当」

「受け取れない」

「どうして？」

「俺、彼女いるって言ったよね」

呆れるように言われた。

でも、めげてなんかいられない。

だって、山科君の為に作ったんだもん。

「別に関係ないじゃない。」

「何が？」

「だって、友達でしょ」

「受け取れない」

「友達からの差し入れっていうだけじゃない」

「いつから？」

「何が？」

「俺たち友達っていつから？」

「……1か月前から。。。」

「はあ？友達なんかになつたっけ？」

「だって、同じ学年だし、話しもしたじゃない？」

「それって、あの階段で告白してきたときの事？」

「……」

「その前に、俺たちかかわりってあつたっけ？」

「……」

「なあ、いい加減にしてくんないかな。迷惑なんだ」

「……」

「それに、俺、分かんないんだけど」

「？」

「どうして、片平が、俺の事を好きだっていうのか。」

「疑ってるの?」

「疑いもするっしょ。」

「馬鹿にしないで!」

「えっ!」

「本当に好きでもない人に、告白なんてしないし、嫌がられてるのわかってるのに、纏わりついたりしないわよ!」

女の子が鼻息フガフガして、肩を怒らせてる姿なんて、みつともないっいたらありゃしない。

とにかく落ちつけ、落ち着くのよ。芹香。

「私は、自分の気持ちを偽ることなく伝えただけ。

付き合っただけとかが、そんな事じゃなくて、

伝えたくて、食べてほしくて。。。。

でも、もういい。伝わらないんなら、もういい。

疑われるなら、もういい。」

「・・・・・・・・」

宙ぶらりんのお弁当を渡すことなく、くるりと向きを変えた

一目散に走り去りたかったが、

これまた、女がすたる。

きつと、後ろ姿を可哀そうにとみているに違いない。

モデルのウォーキング顔負けの歩みで立ち去ってやるわよ!

「よう!片平!」

こんなときに気軽に声を掛けるなつつうの!

同じクラスの榎田が肩をポン!と叩いてきた。

「何？何持ってるの？」

「榎田。」

「何？」

「昼ごはん食べた？」

「いんや、今から購買でパンでも買つとこる」

「じゃ、これ上げる」

「え！俺に！」

「うっん、違うけど。気にしないでいいよ。あまりものだから」

「弁当じゃん！」

「口に合わなかったら捨てていいから」

「わお、サンキュー、片平が作ったの？」

「そうだけど。。。。」

「えー！いいのかよ？誰かに上げようとしてたんじゃないのか？」

「別にいいの。榎田、迷惑なら」

「いや、迷惑なんかじゃ全然ない。もらうよ。食つよ！」

榎田は、いい奴だ。

こんなに喜んでくれるなんて。

とにかく、早くクラスに帰らなきゃ、お昼休みが終わっちゃう。

山科が食べてくれないんじゃ、誰が食べても同じだ。

自信作が榎田のお腹の中におさまった。

拒否って。。。 K 3

あつついゝい、ダリかった。腹減った。

今日も購買か？

昼飯何食おう？

4時間目の体育だけは、勘弁してほしい。

腹は減るし、着替えて遅くなって購買のパンは残りものだし、

適度の運動と腹いっぱいのは後は、強烈な睡魔で5時間目は昼寝の時間になっちまうしで、

時間割考える教師も、自分たちの若かりし頃を思い出して、作れつつの！

そんな事を考えながら、歩いていると結構、強く二の腕をむんずと掴まれた。

おっと、出た！

最近、校門の待ち伏せにも慣れてきた。

敵も近頃、少しは、体力がついてきたようで、

息があまり上がらなくなつて、ちらほら会話が続くようになっていた。

何となく一緒に帰る日々がちょくちょくある。

隣でつらつらと話しているのが、結構くだらなくて面白い。

だが、校内でこんなにあからさまに声を掛けられてたのは、初めてだ。

今度は何だ？

スタバの紙袋？

いや、気軽に受け取ってはいけない。
まずは、中身確かめてからだ。

「…………お弁当」

片平の大胆さに脱帽だ！

彼女がいる俺に弁当を作ってくるとは！

「受け取れない」

「どうして？」

片平、お前がこれほどアホだとは思わなかった。

「友達からの差し入れていうだけじゃない」

いやいや、俺は片平を友達だと思ったことは一度もないぞ！

「迷惑なんだ」

やっぱりはつきり言うべきだ。

ここぞとばかりに追い打ちを掛けよう。

周りに気付かれる前に、絵里に何か言われる前に

片平を遠ざけなければ！

それに、いつどこで、俺の何を見て好きになったっていうんだ。

片平と似合うのは、おしゃれで適度に軽い男だろ！

俺とは正反対のタイプと言っても過言じゃないはずだ。

「本当に好きでもない人に、告白なんてしないし、嫌がられるのわかってるのに、纏わりついたりしないわよ!」
怒ってる。

真剣に片平が怒ってる。

俺は、思わず見惚れた。

ツヤツヤのグロスを引いた唇がワナワナと震えている。
クルンとした目ん玉がつりあがっている。

表面だけの軽いだけの女かと思っていたら、
もしかしたら、ちゃんといろいろ考えて
行動していたかもと、少しすまなく思った。

「伝えたくて、食べてほしくて。。。でも、もういい。もういい。」

片平の言葉が心に重く響いた。

一度俺に差し出された弁当は、再び渡されることなく
片平は踵を返して去って行った。

その歩く後ろ姿が、気取ってた。

やっぱり、片平だ。

片平は俺を笑わせてくれる。

俺は、言葉と弁当に少しさびしく思う反面、

ゆらゆらと揺れる短いスカートから見える太ももに釘づけだった。

俺だって、正常な高校生男子なんだ。

呆れて。。。。Y1

幼馴染であり、私の親友であり、ばか友の芹香は、本当に可愛い奴だ！

突然告って玉砕して、追いかけては、拒否られて今、目の前でしょんぼりしている。

「だから、やめときって言ったじゃん」

「んーーーー」

「山科には彼女いるし」

「んーーーー」

「芹とはあわないよ」

「んーーーー」

「ねえ、元気出して」

「.....」

今にも大きな瞳から、大粒の涙が落ちそうだ。

「芹。だめ、泣いちゃだめだった」

「だって。。。。由利。。。。」

「ダメ、泣いたらホントダメだった」

「どうして？親友なら、気が済むまで泣けって言っはずでしょ」

「親友だから、止めるのよ」

「？」

「芹、泣いたら、顔ひどい事になるよ！

パンダ目だけじゃおさまらず、黒い涙の跡がついて、帰り悲惨だよ！」

「ウエーーーーー」

「芹！」

「由利ってば、あたしの恋心を心配してくれてるんじゃないかって、ひどい顔を心配するなんて、あんまりだ。」

「何言っているの、親友だから、芹の顔を心配できるんですよ！」

「……ン。。。グスン」

「ほら、泣きやんで、今ならまだ、大丈夫だから」

芹香がやっと泣きやんだ。

山科の奴ほんと、むかつく！

たいした男じゃないクセに、あたしの可愛い芹を振るなんて。。。馬鹿な男！

周りのみんなは、芹の外見にまず、惑わされる。

毎日綺麗にカラーで巻かれている、

赤系の茶色のカラーを入れた髪を頭の上で束ねている

完璧な二重で、ぱっちりな目をさらに大きく引き立たせようと引かれたアイライナー

長いまつげはビューラーでクルンと持ち上げられ、

マスカラはダマルことなく綺麗に広がっている。

形よく整えられた眉

色をつける必要がないほど、自然な赤い唇には、いつもツヤツヤのグロスが光っている。

でも、どれもこれも、芹の力量ではない。
芹のお姉さん、綾香さんの力だ。

芹の8歳上のお姉さんは、美容師さんだ
高校を卒業と同時に美容師の道に入り、
お店の見習いから初めて、今では、一人前の立派な美容師さんだ。

芹は、そんな綾香さんの練習台だ

小さいころから、化粧のモデルになり、
カットモデルをさせられ、ひどい時は、5分刈りか？なんて時もあり、

さすがに、芹も半泣きで帽子を決して脱がなかった。

今だって、長い休みのたびに髪の毛の色が違っていて、
よく知らない人たちは、芹の事を不良だっていう人もいる。

でも、片平家の事を知っている人たちは、そんなこと一言だってい
うはずない。

そんな芹の外側だけに魅かれて、どうしようもない男が寄ってくる
事がある。

色恋に疎い芹が心配で、私が芹のあずかり知らぬ方法で、
密かに牽制を掛けて、追い払ってやってる。

芹、感謝しろよ！

あんたが、今のピュアなままでいられるのは、私のおかげなんだか
ら！

まあ、山科に振られたのは、許容範囲として、
まだまだ、もっと素敵な男子が現れるまで、私が守ることにするわ。

山科め、後から後悔しても遅いんだから。。。。

会って。。。。 K4

やっと、あきらめたか。。。。

あの電撃告白から、2か月。

先日の事件の後、俺の周りは静かになった。

校門での待ち伏せもなくなり、

なんだか、物足りないようなスカスカした気分だ。

時折、見かける片平は、楽しそうに、女友達とキャラキャラしている。

一学期の期末テストも終わった。

成績は、まあ、こんなもんだろ。

俺は地元の国公立を狙ってる。

そろそろ、予備校にでも通わないといかんかな。

ああ、めんどくせえ。

「健吾、今度の土曜日、映画でもどう？」

「土曜日か、俺用事あんだよね」

「そう、部活せっかくオフなんだけど、仕方ないね」

絵里とは、夜にメールしあうぐらいで、ここしばらくはデートもしていない。

付き合い始めた当初は、俺も盛ってた時もあったが、

絵里とじゃいまいち、盛り上がらなかった。

俺がへたくそなのか、相性が悪いのか?????

でも、前の彼女とは。。。。いやいや、どうでもいいことだ。

俺は、小さいころから祖父がしている道場に通っている。
え！何の道場かって？

「少林寺拳法」さ。

この話をすると、必ず人は

「えー、以外！」
びっくりのたまう。

俺だって、じいちゃんがしていなければ、絶対こんな武道、習っていないだろう。

武道習っていれば、喧嘩なんかこわくないだろうって言う奴もいるが、

何言ってるんだって感じ！

誰だって、殴られると痛いし、捨て身でかかってくる奴はかえって怖い。

それに、相手に怪我をさせたら、と思つて、逃げるに限るって感じかな。

土曜日の用事というのが、

この、少林寺拳法の練習日なのだ。

少林寺をやっていることは、絵里にも言っていない。

え！なぜかって？

なんとなく、めんどくせえからかな。

じいちゃんの道場からの帰り道にある児童館からは、

いつも、ガキどものうるさい声が聞こえる。
これから、夏の間、あの声を聞くと、あつくるしいかと思う反面、
程よく疲れた俺には、結構和む風景である。

「あ！にいちゃん！」

「おう、正也。」

道場の行き帰りに顔見知りになって、ちょっとした手助けをしたこ
とから、

こいつは、俺を慕っている。

「にいちゃん、練習の帰りか？」

「ああ、おまえ、もう真つ黒だな！」

「おれ、学校のプール授業大好きなんだよね！」

「へえ、泳げんのかよ」

「馬鹿にスンなって。クラスでも一番早いんだぞ」

正也は、エラそうに小学校5年生の早いなんて、知れてるだろうが。

「お前、勉強はイマイチそうだが、運動は出来そうだな」

「ちえ！俺だつてやれば出来るさ。でも、眠いんだよね」

「まあ、小学生は早寝早起きで、遊び呆ける」

「おお、頑張るぜ」

正也は本当に、昔の俺を彷彿させる。可愛い奴だ！

「正也君」

俺と正也と一緒に振り向いた

ゲ！なんでここに……。

「芹！」

「片平！」

俺は、正也に蹴りを入れてやろうかと思った。
なんで、お前があいつを呼び捨てにしてやがる！

会えて。。。 S 4

あゝあ、結局、あれから気まずくなって、
山科君に接近できずじまい。

やっぱり由利の言うとおり、諦めた方がいいのかな？
1学期の試験も終わって、後はスポーツ大会や大掃除とか、
適当な行事ばかり。。。。

スポーツ大会ってどうよ！

この炎天下の下、日に焼けちゃうじゃない！

日焼けは女の敵よ！

「色の白さは七難隠す」って昔の人でも言ってることよ！

片平君は、何の競技に出るのかな？。

応援行っちゃっていいかな？。

こっそり行けばいいか！

いやいや、隠れて応援するなんて、性に合わない。

応援ぐらい、堂々とね！

今日は、お姉ちゃんが遅番の日。

いつものように、寄り道でもして帰ろう！

「こんにちは」

「あら、芹ちゃん。久しぶり！」

「期末試験だったんです」

「みんな、芹ちゃんが来ないから、寂しがっていたわよ」

「ええー、本当ですか？本当ならメツチャ嬉しいです！」

「試験は、どうだった？」

「まあまあかな。丘先生の母校の公立短大の奨学金を狙ってるので、

今回の成績がものを言うしね」

「芹ちゃんは、ガンバリ屋だから、大丈夫よ！」

「そうだといいんですが。。。。。」

早く着替えなきゃ。

持ってきたジャージに、エプロンをつけて、まずは、おやつの後片付けから。

そんな合間も、寄ってくる子が可愛くって！

中には、小生意気な子もいるけど、よくよく、話していくと本当にみんな、めっちゃいい子ばかり！

「芹ちゃんていつも、髪の毛くるくるで可愛い！」

おおー！！なんて素直なの！

「アリガト。後で三つ編みしてあげるね！」

「ヤッター！」

「芹ちゃんのおメメってどうしてそんなにぱっちりなの？」

まあ、なんて正直な感想なの！

「あとで、お化粧してあげようか？」

「芹ちゃん！！！」

丘先生つたら、小学生に変なこと教えないか、ちゃんと見張ってるのね。

でも、女の子が綺麗になりたい気持ちが最近分かってきたせいか、ついつい、小学生にまで、お化粧を伝授してあげたくなっちゃうのよね。

「あれ？正也君は？」

この正也君で言うのが、好きな子をいじめたがる昔ながらの男の子。私にも何かとちょっかいを掛けては、イタズラしてくるんだけど、でも、こいつ、可愛いよね！

「外で、知らない人と話してるよ！」

「！」

危ないわ！今は、いつ何時、事故や事件に会うかもわからないのに、知らない人に連れていかれたら・・・

あの正也君なら、相手に噛みついてでも抵抗するだろうけど、大の大人が相手とあっては、ひとたまりもないはず！

睡眠薬でもかがされて、車で連れていかれたら・・・って、2時間ドラマのサスペンスの見すぎかしら？

あ！見つけた。

木の影になつてはつきり見えないけど、正也君の見上げている角度で相手が大男なのが分かる！

一刻も早く声をかけて助けなきや！

「正也君！」

振り向いた正也君の嬉しそうな顔とは、対照的に大男は、細い目を若干大きくしていた。久しぶりに見た、驚いた表情に胸がキュンとした

話して。。。。 K 5

おお！！！！！

ほんと、片平には、驚かされることばかりだ。

こんなところで、会うとは思ってもみなかった。

気を取り直して、

「よお！何でここに？」

「私はちよつと。。。。。」

よくくみると、片平は結構年季の入ったジャージを着て、

キティちゃんの赤いエプロンをしている。

全然似合っていない！

茶髪にばっちり化粧をした顔にこの服は、どうやっても似合わんだらう。

「片平君は、練習の帰り？」

「ん？なんで知ってんの？」

「その少林寺の道場、お爺さんのお家でしょ」

「ああ、どうしてしてる？」

やっぱり片平はストーカーだったのか！

「芹！この兄ちゃんと知り合いか？」

正也が不服そうに話に割り込んできた。

いつもは、俺を慕う目で見ているくせに、今は、睨みつけてやがる。はは、そんな、そうか。この目はあの目だな。

「山科君とは同じ学校で同じ学年なんだよ」

「な〜んだ、ただの同級生か！」

「！」

ただのだとお。。。。。。

正也の奴、舐めやがって。。。。。
みてるよ。

「芹香、まだ、帰らないのか？」

「えっ！ エ！ エエ。。。。！」

「もう5時だろ。帰れるんなら、送るよ」

「あ？ ア？ アア。。。。？」

俺の突然の変わり身に、対応できず口をパクパクさせている。
出目金みたいで、笑える。

「なんで、にいちゃんが芹を送って行くんだよ。

俺が送ってやるよ！」

「いや、正也君、そういう事じゃ。。。」

「正也は、早くお家に帰って、宿題しなきゃダメだろう？」

「宿題なんて、あつという間にできるわい！」

「さつき、眠いって言ってだじゃないか？」

「それにただの同級生が芹の事、呼び捨てにするなんて、おかしい
だろ！」

「なあ、正也。ただのかわかんねえだろう？」

「ただの！に決まってる。。。」

正也とのやり取りは、アホらしいが、面白い。

適当におちよくってやっていると、呆れたように片平が口を開いた。

「二人ともいい加減にしたら？」

「……………」

「……………」

「正也君、山科君とはただの同級生だし、
山科君も送ってくれなくていいから、早く帰ったら」

「おう、じゃあな。正也」

「う・ん、またね、兄ちゃん」

「山科君、バイバイ」

片平と正也が声を揃えて手を振っている。

帰り道をゆつくり歩きながら、

片平が、あの児童館にいた理由を聞くのを忘れたし、

じいちゃんの道場へ俺が通っているのをいつ、どうやって知ったのか？

これも聞くのも忘れた。

まあいいか！と思いつつ、さっき見た片平の格好を思い出し、
再び笑いがこみあげてきた。

ホント、片平は俺を笑わし、驚かせてくれる。

目の前で山科君が笑ってる。

小学5年生の正也君と同じレベルで、会話し、大口開けて笑ってる。

由利いわく、山科君は、スカしてる？。。。らしい。

本当はそうでもないのに、真面目なふりをして、学校生活をなめるんだって。

でも、そうかな？

眼鏡の奥の一重の瞳は、一見冷たそうで、すごく、真面目そうに見える。

いや、本当に真面目だと思う。

成績は、いつも上位にいるらしいし、

学校をさぼるようなこともしない。

みんなが突っ伏して寝ている、日本史の授業も

じっと教科書を目で追い、先生の話聞いてるらしい。

掃除当番をぶっちーすることもないし、

校則違反のアルバイトをしてるって話も聞かない。

悲しいかな、どれもこれも、友達からの情報だけ。。。。

由利いわく、面白みのない男。。。。らしい。

友達と馬鹿笑いをしているのを見たことないし、

Hな雑誌を回し読みしている事もないみたい。

女の子といちゃいちゃしているのを見たこともないし、

冗談を言って、周りにサービスしてる姿なんて、考えられない。

それなのに、そんな山科君なのに、

正也君をからかって、意地悪な、でも楽しげな笑顔を浮かべている。

それに、いくら正也君をからかうためだからって

私の事を「芹香」って呼び捨てにするなんて。

心臓がズキューンて音を立てて、口から飛び出るかと思ったわ。

山科君の声は、あたしの好みにぴったりなんだもん

その声で「芹香」なんて、呼ばれたら、

ビククリするにとどまわないわ。

まあ、好きになったから、あの声も好きなのかもしれない。

「送ってくれる？」とか何とか言って、

可愛く飛びつけばよかったかしら？

最初で最後のチャンスだったかもしれないのに。

チヨット惜しいことしたかも。

でも、この恰好を見られたなんて、最大の誤算だわ。

お姉ちゃんのお古のジャージは、今にも膝に穴があきそうだし、

キティちゃんのエプロンは小学6年生の誕生日プレゼントで買ったものだ。

きつと、また、呆れられたに違いない。

だって、山科君は私の顔とこの恰好を見て、

笑いを堪えられなかったし、

私と目が会ったび、吹き出すのを押さえているかのようにだった。

珍しく、黙って考え込んでいる私に、正也君は眉間にしわをくつきり寄せて

エラそうにフンと鼻を鳴らしながら、

「芹！あんな男に騙されるんじゃないぞ！」

おっ……と、正也君、あんな幾つよ！

娘を心配する40過ぎの男親みたいだわ。

いやはや、それじゃ、女の子に相手にされないぞ！

私は、彼の行く末を心配してやった。

スポーツ大会始まる。。。 K6

みんな、元気だよな。
熱いよな。

今日はスポーツ大会なんだけど、
授業がないのは、何よりだが、イマイチのれないんだよな。

学期の最後に行われる、6クラス対抗のスポーツ大会。
全員がどれかの競技にエントリーし、勝敗を競う。
それぞれの競技成績の総合点で、優勝クラスが決まる。

クラスの連中は、優勝したら担任がおごってくれる約束の豪華景品に
(どうせジュースか、ドーナツあたりだろ)
踊らされて、一気に盛り上がっている。

隣の席の、津田沼なんて、頭に鉢巻きを巻きなおして、
ガッツポーズまで決めている。

ああ、どうすっかな。
テキストにながすこと出来っかな。

う！いてえ。。。！

こいつ、テンション上げるのは勝手だが、肩をぶつけてくるなよ！
燃える男の津田沼は、ちなみに柔道部の主将だ。

「山科！今日はがんばろうな。お前何エントリーしてる？」
「バスケ」

「そっか！！！！おまえ、背え高いから、ぴったりだよな。
バンバンシュート決めちゃってくれ！」

決めちゃって？

津田沼、お前キャラ変わってね？

「お前は何でんだよ？」

「俺か？俺はリレーなんだ」

「！」

ムンクも真っ青って顔に俺がなつてないだろうか？

そりゃ、あかんやろ！

なんで、津田沼が……！

リレーは最終の種目で、各競技がすべて終わって、

全員がトラックに集まり、勝敗の行方を見守るのだ。

いわば、この大会の花形競技だ。

したがって、リレーに選ばれる選手は、足に自信のある奴ばかり。

陸上部は出場できないが、他はそうそうたるメンバーだ。

まず、サッカー部の足立だろ。野球部の森にバスケの境。

完璧なはずのメンバーの中に、なぜに、津田沼がいるんだ？

きっと、脅かしたに違いない。

津田沼は、女子の黄色い声援を受けたかったのだ。

武道は地味だ。

女子が応援に来る事なんてまずない。

そう、考えるといじらしくて涙が出てくるじゃないか？

身長175？、体重89？（俺は90以上はあると思っているが。

）

運動神経が悪いわけではないが、何せ体重が重い。

女子の黄色い声援が失望のため息に変わる光景が、津田沼には見えていないのだ。

何を勘違いしたのか、津田沼が肩を組んできた。

「山科あゝ。大丈夫だよ。バスケは体育館だから、一番端の会場だし、応援も少ないから、多少のミスは見過ごされるさ」

お前に心配されたかない！

自分の心配をしる！

「お互い頑張ろうな！」

無理やりファイトいっぱい……っ！って感じの腕を交差するポーズをやらされた。

俺はケイン・コスギかって！

いやいや、間違っても津田沼お前は無理だぞ。

だって、お前は陰で「石ちゃん」って呼ばれてるの気付いてるか？

石ちゃん？「ホンジャマカの石塚に似ているからだろう！」

この光景をクラスメイトが怯えたように見ていたって聞いたのは、かなりたってからだった。

スポーツ大会始まって。。。 S 6

密かに聞きまわって？

いいや堂々と4組の友達から出場者名簿のプリントをゲットしたわよ。

山科君は、B体育館でバスケか。
背が高いから選ばれたんだろうな。

もちろん応援行っちゃうぞ〜！

私？私はいたって、運動音痴。

本当は、女の子の日だって、ドタキャン見学にしようと思っていたのに、

「あんだ、絶対に許さないわよ！」

由利がすこんでくる。

由利は、このあたり、結構律儀で、行事ごとはキチンとやる。そりゃ、由利ぐらい運動神経がよくて、なんでもこなせたら、スポーツ大会なんて楽しい事間違いないし！

由利は気付いていないかもしれないけど、

スラリとしていて、出ている所はボン！と出てて、

男子は由利が体育をしていると密かにガン見しているのを私は知ってる。

後ろの席の榎田なんて、

「高山はスタイルいいよな〜。片山、もうちょい成長出来たらよかつたのにな〜」

いつも、からかってくれる。

キー！私だってボンキュッボンになれるんならなりたいわよ。

あ！いけない。山科君のバスケットが始まるわ！
1回戦は私のバレーボールと重なってたから、
応援に行けなかったけど、これは行かなきゃ！

結構、集まってるな。

でも、見ているのは、1組と4組の人ばかり。
まあ、それもそうか。他のクラスの子が応援にくるのは、
私みたいに好きな子がいるか、彼氏がいるかぐらいよね。。
とりあえず、2階のスタンドが少しあいているから、そこから応援
しよう！

ピー！

ホイッスルが鳴って、ドキドキしてきた

山科君は5番のオレンジのゼッケンをつけている。
普段は眼鏡を掛けているけど、今日は危ないから外してるわ。
眼鏡なしもそれはそれで、よろしい！

な〜んか、手え抜いてない？

タラタラとやってるわね。

山科君で真面目だから、こんな所でも一生懸命汗流して走り回るの
かと思ってるなら、

何となく、テキトーにやってるように見えるのは、私だけ？

前半が終わって、ほかの人は肩で息をしたりするのに、山科君は
平気な顔をしてる。

やっぱり、絶対にマジでやってない！

隣の男子に何か話しかけられて、眼鏡を掛けてこっち見た！

うあ！目があった。。。かと思ったら、3人横に彼女の逸見さん

がいた。

逸見さんは、山科君を「健吾」と呼びながら、嬉しそうに手を振っている。

山科君は、表情変えずに頷いてまた、眼鏡を外した。

なんか、力抜けてきた。

分かっていただけ、やっぱり、彼女なんだね。。。いままで、カレカノしているところを見たことなかったから、気にしなかったけど、「健吾」だって。。。

ハア、もう家に帰りたくなってきた。

帰ったらダメかな。

由利、怒るだろうな。

脱力感満載で、後半のホイッスルを聞いた。

スポーツ大会 少しはやるか。。。 K7

滝川が肩をつついて2階を見やりながら

「彼女きてるぞ」

冷やかし気味にいつてきた。

なぜが、ため息が出そうだった。

とりあえず、確認しておこうかと思い、眼鏡を掛けて2階の示された方を見上げると、片平がいた。

怒っているとも笑っているともいえない、何とも不思議な表情で俺の方を見ていた。

第一試合が終わって、水飲み場に行った。

A体育館で声援が上がっていたので、少し覗いてみると女バレだ。

6組女子が戦っていた。

いや、片平以外は戦っていたって言う方が正しいか。

片平は、足を引っ張っているとしたか思えなかった。

自分に向かってくるサーブを、ドッジボールのように受けてしまっし、

スパイクはレシーブすることなく、よけている。

でも、本人はいたって真面目な顔で、ほかのチームメイトと声を掛け合っている。

たぶん、ほかのやつらは、片平の悲惨な運動能力を十分理解しているて、

怒ることなく、励ましながらなんとか、試合が成り立っているといった感じだ。

ああ、ありや痛いだろ！
相手の結構強力なスパイクが額に直撃だ！
ボールの縫い目の跡が付いているだろう。
まあ、逃げなかっただけでも、誉めてやろう。
選手交代か。もっと早くに変わればいいものを、よく頑張った。

涙目でおでこに冷えピタを貼ってもらう姿が
小学生みたいで、何とも笑えた。

一緒に見ていた滝川が、俺の顔を見て驚きながら聞いてきた。
「山科、何見て笑ってた？」

滝川が不思議そうに俺の視線の先を探した。

「おー、芹香ちゃんじゃないか？」

芹香ちゃん？片平は男子からそんな風に呼ばれているのか！

「情けない姿も可愛いね」

「滝川、お前彼女いるよな！」

「え！いるよ」

「そのセリフ、彼女の前でも言えるか？」

「え？」

何となく面白くなかった。

『やっぱり見に来たか』
来るとは思わなかった。いや訂正だ。密かにきつと来るだろうと思
っていた。

いや、もしかしたら、期待していたのかもしれない。

絵里が2人ほど挟んでこっちを見ていた。

「健吾」と笑って手を振ってきた。

横にいるのは友達だろうか？

そいつに何か言われたようで、絵里が少し顔を赤くしている。聞こえたという意味で頷いた。

でも、片平の姿が先に目に入ったのはなぜだろうか？

冷えピタはもうはがしたのか。

もう一度、あの姿を見て笑いたかった。

後半のホイッスルが鳴った。

首を回しながら、片平の頑張っていた姿を思い出し、

俺も少しは見習おうかと、ちよつとだけ気合を入れた。

スポーツ大会 やりすぎ!。。。。 S7

前半とは見違えるようだった。

ボールに向かって走る山科君は、こっちが驚くほどサマになっていた。

私の欲目?あばたまえくぼ?
いやいやそんなはずはない。

横にいた、男子が聞き捨てならない事を言った。

「山科、やっと本気出したな」

何?それ何?どういうこと?

今まで、隠してたの?

運動神経のいい奴がなんで隠したりするの?

私は不思議に思い、話したことない男子に問いかけたわ。

もちろん、可愛くね!

「ねえ、今聞こえたんだけど山科君が本気出したってどういうこと?」

急に話かけられてびっくりしていたみたいだけど、

「え!ああ、山科って見かけによらずスポーツ万能なんだ。

高校に入った時も、各部からの勧誘がしつこくて、困ってたみたいだから」

その男子はにつこり笑って教えてくれた。

ありがと!いい人でよかった。

嘘みたいだけど、ホントの話なんだって、見ていると一目瞭然!

レイアップシュートが決まる。

リバウンドを奪う。

ドリブルをカットする。

ロングシュートで3ポイントゲット。

山科君がボールに触れる度、ゲームが動く。

体育館が先ほどとは打って変わって、

湧きかえっている。

前半のタラタラした、試合運びが一転して、

スピーディでどんどん点数が入っていく。

もちろん4組の女子は、点数が入るたびに「キヤー」と奇声を発しているし、

男子は「いけー」とか何とか野太い声が体育館に響き渡っている。

山科君が点数を決める度、逸見さんは友達と抱き合って喜んでいる。

私も、出来るなら、大きな声で応援したかった。

ただ、「頑張つて！」て叫ぶだけでいいのに。

グジグジするなんてらしくないけど、彼女の前だとやっぱり遠慮するしかないわよね。

大差で4組の勝ちが目に見えていたのに、

最後に山科君は、余裕でダンクシュートを決めた。

会場全体が、一気に最高潮だ！

【キヤーー】

【ウォー】

この日一番の歓声が上がった。

くそ！やりすぎだっつうの！

嬉しそうな逸見さんを見て、涙が出そうだった。

友達から何か言われて、恥ずかしそうに頬を紅潮させている。

山科君がカツコよすぎて、苦しかった。

だんだん、腹が立ってきた。

そして、泣きたくなってきた。

なんで、山科君なんて、好きになっただらう。

何も彼女がいる人を、好きにならなくても好かったのに。

自分が馬鹿みたいだ！

タオルで汗を拭う山科君を囲んで、4組の男子も女子もハイタッチや肩をたたいて、喜んでいる。

逸見さんは当然のようにコートに降りて行って、その輪をかき分けて声を掛けている。

クラスメイトから冷やかされて、それでも嬉しそうに笑っている逸見さん。

ああ、ダメダメ、涙ポロリしそう。。。。

いかん、こんなところで泣いちゃ女がすたる。

このセリフ、山科君に告ってから使う事が多いわ。。。。

とにかく、由利のそこへ行って慰めてもらおう。

いいや、傷口をえぐってもらおう。

最後に山科君の雄姿をと思い顔を上げると目があった。

眼鏡の奥の細い目がより、細くなっている。

変な顔！

あんな、変な顔の男なんて全然カッコ良くないんだから！

私は年甲斐もなく、《イーーーーダ！》ってしてやった。

フン！ちょっとだけ、いい気味！

スポーツ大会 イーダつて。。。 K8

あいつ、片平、なんであんな顔してたんだろう？

あいつに負けじと頑張ったのに、

片平は、悲しそうな顔をしていた。

告白を断った時でも、あんな顔しなかつたくせに。

遠目だからよくわからないが、

今にも泣きそうだ。

横の男が心配そうにちらちらと横目で見ている。

何みてんだよ！

クラスの奴らが俺を囲んで、喜んでいる。

少し、頑張るつもりが、ついつい力が入った。

試合中、点数を入れる度、チラッと片平を視線の片隅に入れた。最初は偶然だったけど、驚いて喜んでいる顔が面白かったから、どんどん俺の気持ちヒートアップしていったみたいだった。

いつも驚かされてばかりだから、驚かせてやろうじゃないのってね！

近くの公園にバスケットゴールがあつて、

小学生の頃は、毎日、ツレと集まって遊んだ。

中学生の時には、誰が一番ダנקをカッコ良く決めれるか、仲間とかわるがわる試みていた。

その頃はまだ、身長もこんなになかったから、難しかったが、
今なら出来るだろう。

片平のあの大きな目ん玉をギョツと音が鳴るぐらい見開かせたい。

もう少しで試合終了か。

時計を確認し、余裕でボールを受け取った。

相手チームはへとへとで、追ってこれていない。

まあ、こんだけ点差が開いていたら、追う気もないわな。

ん、じゃ、やらしてもらいましょっか！

片平、見てろよ！

思いつきりジャンプして、リングにボールを叩き込んだ。

俺はそのまま、リングにぶら下がり、グイッと足を振り子にして
着地した。

うわ！やりすぎたか！

女子の歓声がうるさかった。

片平の事しか考えなかったが、他の奴らもいたんだ。

どんな驚いた顔をしているだろうと見上げると、

片平は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

なんでだ？

試合終了のホイッスルが鳴り、クラスメイトがコートになだれ込ん
できて、肩を叩かれた。

痛いっつうの！

片平の事が気になり、汗を拭ってからと思っていたら、絵里が近づいてきた。

いけね。片平の事ばかりきにして、絵里の事、忘れてた。

他の奴らは気を利かして、道をあけてる。

おお、まるで、モーゼの十戒のようだ。

「健吾、おめでと。すごかったね。こんなに健吾がバスケットできるなんて知らなかった」

絵里がにっこりほほ笑みながら言う。

周りからの冷やかしの視線と、中にはヒューヒューとはやし立てる奴もいた。

おまえ、指笛できねえのか！

出来ないなら黙っとけ。口で言うな！

でも、まずいよな！

なぜか、片平にばかり目がいつてしまう。

あいつから目が離せないんだよね。

片平を見上げると、おもむろにやられた。

これまた、なんでだ？

でも、その顔も笑えた

《—————ダ》

片平、お前幾つだ？

スポーツ大会 走るの?。。。。S8

由利を探した。

見つけると抱きついてしまった。

トイレに行っている隙に他の友達から、
バスケットでの山科君の事を聞いたのか、
私が近寄っていきなり、

「よしよし」と珍しく慰めてくれた。

「だから、山科はよくなって言ったよね」

「どうして?」

「あいつ、猫かぶってるよ。絶対!」

「なんで、わかるの?」

「女の勘よ!」

「由利、私も女の子だけど、勘が働かないよ?」

「芹は、すべてにおいて、女の勘がないじゃない!」

「何気にひどいんですけど。。。。」

「ふくれっ面を直しなさい。最後の競技が始まるよ」

「あ!そうか、応援しなきゃね!」

「そうよ、総合優勝して、担任になんか奢らせなきゃ」

「えー、えっちゃんお金ないんだから、無理させないで上げて

よ

「何言ってるの。それとこれとは別よ!」

「だって。。。。」

「担任なんだから、これぐらいはしてもらわなきゃ!」

「。。。。」

「ほら榎田来たよ」
リレーの選手の召集はもうすぐみたい。

「榎田！頑張つてね！」

「おう！優勝したら、なんかご褒美くれよ！」

「ええー！ー私が？」

「そう！片平が」

「……」

「この前みたいなの、昼の弁当で、どう？」

「え！そんなんでいいの？」

「ああ、どう？」

「いいよ。じゃ頑張つて走つてね！」

会話を周りは盗み聞きしていたみたい！
なんだか、ニヤニヤされた。

どうして？

うちのリレーの選手は最強に近いとおもう。

テニス部の袴田君、バスケの岡本君に三崎君、そしてサッカー部の
榎田だ

サッカー部で1、2を争うほど、榎田は足が速いらしい。

各クラスのリレーメンバーが召集場所に集まりだしている。

各クラスのメンバーの顔触れを見ても、この競技にかける意気込み
が伝わってくるわ。

そのはずなのに、あれ？ あれれ？

4組どうしたの。

一人、ガタイのよすぎる人がいるよ！

どうしちゃったのかしら？

え！なんで！なんで、あそこに山科君がいるの？

4組のリレーメンバーに山科君が無理やり連れ込まれている。

どうも野球部の森君が負傷退場で、かわりに担ぎ出されたらしい。

さっきまで、落ち込んでいたのに、山科君の走る姿が見れるなんて！
また、ドキドキしだしてる。

バスケットはすごく上手だったけど、走るのは、どうなんだろう？
スポーツ万能って言うてたけど。。。。

スタートラインにクラスの代表6人が並んだ。

うわあ、私まで心臓、壊れそう！

ピストルが鳴った。

目の前を男子6人が競うように走って行く。

はー！、迫力あるうー！

うちの第一走者は3番手につけている。

頑張って！

先頭は山科君のクラスだ。

やっぱり、一番にバトンをもらうとごたつかなくていいみたい。

どンドン引き離されていく。

あ！2位3位を争っている、1組の第二走者とうちのクラスの第二走者の岡本君が接触して

1組がバトンを落とした！

チャンス！

2位に浮上したわ！

でもそのごちゃごちゃしたことで、4組は余裕で1位独走だわ。

1番前を走る4組とはかなり差が開いているけど、頑張つて。

あんなならやれる！

第三走者の三崎君にバトンが渡るとどんどん一番前と差が詰まってきた。

え！前を走っている4組の走者つて、もしかして、柔道部主将の石ちゃん？

あのガタイの良さはそうに違いない！

4組女子の悲鳴が聞こえる。

その反対に6組からは「三崎」コールが起こる。

石ちゃんは顎が上がっているみたい。

私も山科君を追っていた時の経験からわかるけど、あれは、結構きているわね！

ついに、最後のコーナーのところで三崎君が石ちゃんを抜かし、差を開けていく。

「ぎゃーーーーー！」

「ぎゃーーーーー！」

濁点がつくのとおつかないのでは、大違い！

正反対の悲鳴が、グラウンドに響く。

とうとう先頭でアンカーの榎田にバトンが渡った。
4組のアンカーは、、、山科君だ。

スポーツ大会 俺がか!。。。 K9

なんで、俺がここに立たなきゃいけないんだ。

バスケットが終わって、一旦着替えに戻ろうかとクラスに帰ってみると、リレーのメンバーと男数名が、難しい顔でなにやら深刻に話をしていた。

アンカーの森がバレーボールで張り切りすぎて、ジャンプの着地に失敗。足をくじいたらしい。
あほか、お前は!
泣く泣くりレーのエントリーからはずされた。

そこで、だれがかわりに走るかだ。。。。

やめてくれ。こっちを見るな!
クラスメイトの視線が痛い。
ちよつとバスケットで張り切りすぎたのがいけなかった。
みんなの期待のまなざしビームが俺を突き刺す。

「走らないぞ」

「なんでだよ。山科、足速いじゃん」

「バスケットで俺疲れたし」

「うそ、ばっか!終わった時でもあんまり息上がってなかったぞ」

「他にいくらでもいるだろ!」

「いいや、山科が適任だって」

「嫌だ。走らん」

「山科!」

俺は絶対に首を縦に振るつもりはない。

ぐえー！ うー！ー！ ギブギブ！

俺の首に回っている手を、降参の意味を込めて、ポンポンと叩いた。後ろから羽交い絞めにしたのは、誰だ？！！！

「津田沼……」

「走るよな？」

柔道部主将だろうが、脅かしに屈するつもりはない

「走るよな？」

「……」

「俺の高3の最後のひのき舞台をつぶすつもりか？」

津田沼はにっこり笑った。

「わかった。走るよ」

俺はがつくし頂垂れた。

津田沼の脅かしに屈したわけではない。

かえって、すごんでくれた方が拒否りやすかった。

でも津田沼はあの顔で、にっこり笑ったんだ。

にっこりと……

思わず「石ちゃん」と口を出そうになった。

津田沼は自分でひのき舞台をつぶしていた。

高崎、境と予想通り順調にバトンがトップで渡り、
2番手以降を大いに引きはなして、津田沼にバトンが渡った。

女子の悲鳴が聞こえる。

男子がここぞとばかりに罵声を浴びせている。

どンドン6組が津田沼に近づいてくる。

抜かされるのも時間の問題だ。

スタンドに、片平がいた。

さっきの《イーイーイーダ》のお返しに何かやってやらなきゃな！

ついに抜かされたか。

6組のアンカーを見た。

サッカー部の榎田か。

手強いな。

榎田は優勝はもらったといわんばかりにニヤリと笑った。

フン！優勝なんてどうでもいいさ。

でも、片平にお返ししなきゃいかんから、悪いな。

そう簡単には優勝させないさ。

先に榎田にバトンが渡った。

津田沼は顎が上がっている。

なんとかこけずにここまで来てくれ！

俺は思わず、手を挙げて、叫んでいた

「津田沼」

確かにバトンは貰った。

榎田の背中をまっすぐに見つめて、ぐんぐん加速した。

榎田が振り返る。

少し目を見開いている。

もう少しだ。

捕まえられる。

そして抜き去ってやる。

「榎田。頑張ってる!!! 榎田!!!」

片平の声だ!

榎田のスピードを突然上がった。

《こいつ?!》

「榎田!!! すごい」

片平の声だけ、なんで耳が拾ってくるんだろう?

その声が俺のやる気を失せさせた。

榎田が俺のすぐ目の前でゴールテープを切った。

やっけてらんねえ!

山科君は足も速かった。

榎田が速いのは周知の事実だから、驚くほどではないのよね。
でも山科君が速いのは、みんなびっくり！

先頭でアンカーの榎田にバトンが渡った時は
楽勝だとクラスみんなは喜んだの。

「こけないでね〜！」
冗談交じりに応援していたもん。

でも、山科君がどんどん追いついて来て、
みんな悲鳴に近い声になっていった。

「ほら、芹も榎田を応援してやんなよ！」

「うっ・うん」

「ほらって」

由利にツンツンと脇腹をつつかれた。

「榎田ー！ー！」

私は、一生懸命榎田を応援しながら、山科君を見ていた。

「フォームがなめらかで無駄がない」

運動音痴の私がエラそうに分析しちゃってた。

ああ、惜しい！

もう少しで抜かせたのに。

山科君がゴールテープを切るのを見たかったな〜。

でも榎田がゴールテープを切ってしまった。

残念に思ったのは6組の中ではわたしだけだろう！
決して、悟られちゃいけないわね。

リレーでの優勝が決定打となり、わが6組が総合優勝した。
担任のえつちゃんは大喜びで、大奮発して、みんなにマツクを奢っ
てくれたけど、

大丈夫かしら？

後から叱られないのかな？

みんな着替えるために教室に帰って行く中、日傘を忘れたことに気
付いた。

ほんと、傘ってついつい忘れちゃうのよね！

バスケの時のショックで、あそこに置き忘れたに違いない。

「由利、忘れ物したから先に行つてて」

「ついていこうか？」

「大丈夫！」

体育館は校舎のはずれにあつて、もう誰もいないはずなのに、
入口の階段に山科君が座つてた。

そつだ、今の気持ちを伝えなきゃ！

「山科君」

「片平……」

「リレー惜しかったね。」

山科君でバスケもすごく上手だし、足もすごく速いんだね」

「ああ？ でも、6組が勝ったじゃないか？」

「でも、榎田はサッカー部の中でも一番かっついていわれるくらい、足、

速いんだよ。

それに敵わないのは仕方ないんじゃない？」

山科君がそんなことを気にしているのが、不思議だったけど、また、別の一面がみれたわ！

「ああ？敵わない？仕方ない？何だそれ？」

え？どうして？その悪代官のような嫌な感じは何？

「片平は、榎田を応援してたもんな」

「だって、同じクラスだし。。。」

「そうだよな。ただの同級生より、クラスメイトの方が格が上だしな」

どうしちやたんだらう？

「何それ？」

「別に。。。」

「山科君、疲れてる？そうだよな、バスケの大活躍とリレーのアンカーじゃね」

「別に、疲れてないさ」

「私なんか、バレーボール1種目でさえも、今、筋肉痛気味なのに。。。」

思わず太ももをさすった。筋肉がほぐれるみたいで気持ちよかった！

「それより、おでこは大丈夫なんか？」

「おでこ？」

「冷えピタ貼ってもらってただろ？」

「見たなの？見に来てくれたの？」

「いや、たまたま通りがかって。。。」

何がおかしいのよ！山科君が肩を震わせて笑っている

「どうして笑うの？」

「いや、思いだして・・・クク」

一生懸命の名誉の負傷を笑うなんて、失礼過ぎませんか！
メツチャ腹立ってきたわ！

「どうせ、運動音痴ですよ」

「ほんと、あれほどひどいのは珍しいよな」

怒りMAXだわ！

思わずゲンコツで飛びかかってやった。

くやしい、寸前で手首を捕まえられて、引っ張られた。

うわ、こんなに接近したの初めて。

山科君が階段に座っているから、

いつもは見上げてばかりだけど、こんな風に見下ろすのは、初めての事だよね！

すっごく新鮮だわ。

うわあ、こんなに近くで山科君を見ると、それなりにハンサムだわ！

メチャドキドキしてる。。。

山科君にこの鼓動が聞こえてないかな？

よく見ると奥二重なのね。

まじまじと見てしまった。

「人に手を挙げると危ないぞ」

ぶつきらぼつにつぶやくとともに手もそっけなく離された。
あつぶないじゃない。

後ろにこけるかと思った。

一言文句を言ってやるうかと思つて口を開きかけた途端、はらりと頭から大きな白い布が被さつた。

タオル？

どうして？

ちよつとタオルをひっぱらないで！

わぁーこれ以上無理ひっぱるとぶつかっちゃう！

唇が重なつた。

一瞬だつた。

ゆっくり瞬きをして、山科君を見下ろした。

ファーストキスは、好きになつた人として思つていた願いがかなつた。

それなのに、なぜか途方に暮れた。

焦って・・・S10

本当に、キスしたんだよね？

「どうして？」

「・・・」

「どうして？」

「・・・」

ドキドキの心臓がまだ、続いている。

顔も絶対赤くて、変な顔になっているに違いない。

「私ずっと願ってたの。初めてのキスは好きな人として！

だから、すごい嬉しい！嬉しいのはずなのに・・・」

「・・・」

「や・・・まし・・・な君？」

「悪い。」

「エッ？」

「いや、つい・・・」

「つい？」

「ああ、だから、つい・・・」

「そう。。。つい・・・か。。。」

何となく、勢いだっただんだ・・・。

「でもいいよ！山科君はついででも、私は嬉しいし！」

「片平・・・」

「ほら、教室にもどろろっよ！HR始まっちゃっよ！」

「ああ。」

「先に行くね。じゃあね！」

由利「——！」

こんな時、私はどうしたらいいの？

すごくうれしいのに、すごく悲しい。

後ろ姿なんて気にしてられない。

私が走れるだけのスピードで体育館を後にした。

廊下をとぼとぼと歩いていると、頭を叩かれた。

「片平、顔赤いぞ、どうかした？」

「あ！榎田！びっくりさせないでよ」

「リレーの応援アリガトな！」

「。。。。 やつぱり、足速かったね」

「そうか？6組の山科に抜かされそうだったけどな」

「。。。。。」

「でも、片平が応援してくれて、ご褒美ももらえると
思うと負けられないからな」

「そうだね。あした、約束したお弁当作ってくるね」

「ああ、楽しみにしてッぞ！」

クラスに戻ると、アンカーの登場にクラス中が湧いた。
みんな、嬉しそう！

「どうした？芹？」

「うん。。。。。」

「なんかあった？」

「なんかって？」

「例えば、山科関連で。。。。。」

「！！！！」

「やっぱり。芹がそんな顔するのって、山科が関わってるんだよね」

由利の勘の良さに脱帽だ！

「帰り聞かせてもらうからね」

うあ、怖ッ！

由利は美人さんだから、すぐまねるとより怖い。

でも、私も聞いてほしかったから、

「じゃ、帰りは家でも寄ってく？」

「いいね、久しぶりに芹のフレンチトーストご馳走になるかな」

「了解！でも、その前に明日の買い出しに付き合ってね。」

お弁当のおかずを買わなきゃ！

「あれ、芹っていつもは、週末にまとめ買いするのに」

「そんなんだけど、明日は、榎田に優勝のご褒美のお弁当作る約束したからね」

「えーーーーー！」

周りがこの会話を聞いていたらしい。

榎田は男子に首を絞められているし、

私は、クラスの女子から質問攻めだ。

「ねえ、とうとう噂どおりになったの？」

「ゲットされちゃった？」

「榎田って、なんだかんだいっていい奴だもんね」

「？」

みんな何言ってるのかしら？

由利が割って入って

「ストーリーップ！はい、そこまで！」

みんなが思っている事は全く何にもないから！」

「えーーーーー！」

「芹、見てたらわかるでしょ！」

「まあ。確かにそうか・・・」

「榎田って案外奥手なのね」

「ていうか、ヘタレなのよ」

「ほつとけ！」

榎田が女子の発言に顔を真っ赤にしている。

榎田が奥手って、ヘタレって、何にしろう？

みんな、よく主語や目的語がなくて会話がつづくわね！

6組がそんなこんなで湧いている光景を

山科君がじっと見ていた事を、由利は気付いてたんだって。

だいぶ後から教えてもらったんだけど。。。。

焦って・・・S10(後書き)

長い間、更新止まってしまいました・・・。

一度、止まるとなかなか続かないものですね・・・。

身に染みました。

焦らされて。。。 K10

まずい！
やばい！

目の前の片平があんまり、可愛すぎて、ツボに来た。
思わず、タオルでかぶせてキスしてた。

いや、不味いだろう！

片平は、あの大きな目ん玉をぎよろつとさせて
俺をじっと見つめてる。

何か言うべきだろと思いつつ、なんて言えばいいんだろう

片平に答えた俺のヘタレぶりに、自分をド突きたくなった。
「つい」ってなんだよ！「つい」って！

でも、走り去る片平を追いかけたかったけど、
あの言葉に俺は、一步も動けなかった。
「やられた！」って思ったのさ。
もう、マジで勘弁してほしい。

『私ずっと願ってたの。初めてのキスは好きな人にとって！
だから、すっごい嬉しい！』

片平、俺をどうするつもりだ！

とにかく、追いかける。追いかけるんだ！

やっと廊下で見つけて声を掛けようとしたら、先を越された。

榎田だ。

鈍い奴が見たら頭をぱくんと叩いたと思うだけかも知れないが、焦っている俺から見ると、なれなれしく、髪の毛を触るな！と感じた。

優勝のご褒美の弁当だとく！！！！

それを知っていたら、俺は決して負けなかった！

6組の前を通り過ぎるふりして、中を伺った。

6組の連中は優勝の余韻でハイになっていやがる。

片平と榎田をくつつけようと躍起だ。

俺だって知っているさ。

榎田が片平を狙っていることぐらい。

それがどれくらい本気がってわかったのが、さっきのリレーだな。

片平の声援は、きつと榎田にも届いたのだろう。

あいつのギアが急に加速したのを感じた。

男どもが、あからさまに片平に告らないのは、告れないからだ。

榎田がずっと、片平を狙っているって言う噂が

男の中の、いや、学校中、水面下で囁かれているからだ。

サッカー部エースの榎田は、顔も勉強も、まあ、いい方だと思う。あいつはサービス精神旺盛なムードメーカーで、その上、優しいときて、

男女を問わず人気がある。

そんな奴にかなうはずないとみんな思っている。

到底、俺には真似できないし、したいとも思わない。

本来なら、彼女が途切れることなくいてもいいはずなのに、ここ一年ばかり、独り者なのは、片平に狙いを定めたからだともっぱらの噂だ。

榎田は、断る理由を必ず「好きな子がいるんだ」ってアピッてみたいだが、

片平は、自分の事だと思ってなかったようだ。

なにしろ、俺に告ってきたぐらいだから。

今までは、そんな噂もどうでもいいことだった。

でも今は、《気付くな!》と思っている自分がある事を否定しきれない。

もし、片平が榎田の気持ちに気付いたり、告られたりしたらどうするだろう？

褒美の弁当を作ってやるぐらいだから、嫌いじゃないだろうし。。。。

そんな事をグルグルと考えながらいると、目があった。

あの女、怖えんだよね。

近藤由利。

片平の幼馴染兼親友。

あいつの兄ちゃん、内の学校の先輩で、伝説の空手部の主将……
のくせに、アマアマのシスコン。

以前、命知らずの男子が待ち伏せして告ろうとしたら、

「25年早い」と兄妹二人して、凄まれたらしい……。

25年ってなんだよ！四半世紀ってことか？

あいつが、裏の顔を持っている事に片平は気付いていない。

片平に彼氏が出来ない理由の一つが、あの裏の顔だ。

片平に言い寄ろうとしている男を片っ端から蹴散らしている、
強力なボディガード！

これも男の中では、周知の事実だ。

噂されて。。。。S11

大変なことになっちゃった！

あの体育館の階段でのキスが、誰かに目撃されてたの！

いま、3年生の間で、ううん、全校生徒の間で、噂が舞っている！

噂の内容はこうよ！

「スポーツ大会で大活躍の3年6組の山科健吾君（帰宅部）が、校舎のはずれの体育館の階段で、女子と熱烈なディープキス！

相手の顔は、山科君の大きなタオルが被さっていたため、はっきりとわからなかったが、

吹奏楽部部长でもある彼女の武田絵里さんであることは、間違いないだろう！」

ちょっと週刊誌のスクープ風というとこんな感じ！

でも、この噂には2か所、訂正を入れてほしいわ。

ディープキスではなく、ホンの触れるか触れないかぐらいのチュッ
て感じよ！

このキス、すごく素敵だったんだから。
だって、私のファーストキスだもの！

そして、相手も訂正してほしいわ。もちろん、わ・た・し・に！

でも、悲しいかな、真実を知っているのは、3人だけなの。

当事者の二人と、由利。

由利には、洗いざらい吐かされて、ううん、聞いてもらったの。私はそれで、何となく落ち着いたけど、反対に、由利は、昔のスポ根マンガの主人公みたいに、目の中に炎が見えるぐらい怒っていたわ！

「なんで、あんたは、怒んなかったの？」

「だって、嫌じゃなかったし。。。」

「嫌じゃなかったって。。。あいつには、彼女がいるのよ!」
「分かってる。。。」

「二股駆けられてもいいわけ？」

「ううん、それは、絶対に嫌!」

「じゃ、愛人は？」

「愛人って・・・別に結婚してないし。。。」

「そういう問題じゃないでしょ!」

「でも。。。。まだ、独身だし。。。」

「独身だったら何やつてもいいの？」

「いや、高校生であって。。。」

「高校生なら、彼女がいても他の女子にキスしても構わない訳？」

由利は息を切らせて怒っている。

あまりの剣幕にシユンとなった私は、有無を言わず約束させられたの。

「今後、山科には近づかない事!」

「。。。。。」

「芹!」

「。。。。。」

「芹香!」

「。。。。、分かった」

私は、1 m以内の山科君への接近の禁止された。

由利は、このうわさを耳にするなり、眉をひそめ、

「あいつ馬鹿か！」

女の子とは思えない、低い声でつぶやいてた。

由利、怖すぎるよ。

山科君は、それまで、真面目なだけの男子として、女子の中では認識されてたのに、

この前のスポーツ大会から、一躍時の人になってしまって、私としては、嬉しいような悲しいような。。。。

そうそう、あの大会の次の日、約束通りに榎田にお弁当を作って渡したら、

みんなから、「うんうん」みたいな目でみられて。

そんなに、私いいことしたのかとおもって、由利に聞いたけど、

「芹は気にしなくていいから。」

相手にされなかったわ。

まあ、もうすぐ、夏休みだから、この噂もそれまでね！

噂にさらされて。。。 K11

誰だ！見ていた奴は！

そして、それを面白おかしく噂した奴は！

何が、ディープキスだ。

あれがディープなら、

この世のキスは全部ディープもディープ、超ディープキスばかりだ！

それに、相手を決めつけるな！

見えなかったのに、憶測で噂するな！

ハアーーー！

ホント、噂って怖いよね。。。。

この噂が流れてから、周りの俺を見る目が、違っていているように思うのは

気のせいか？

とくに女子からは、ちょっと色っぽい目で見られている気がする。

冗談じゃない。

今まで、なんとか平和に送ってきた、高校生活がおジャンになっちゃまう。

でも、片平の名前が一言も上がってこないのが、
せめてもの救いだ。

あいつがさらしものになってもなったら、俺はきつと暴れていたに違いない。

来るだろうなと思っていた。

いや、こっちから行かないかと思っていた。

つつい、嫌な事は後回しにしちまった。

何より、めんどくさかっただけなんだが……。

メールだ。

「話があるの。会って話そう。いつ会える？」

日曜日、俺たちは、学校の帰り、近くの公園で待ち合わせた。

こんなうわさが流れるもつと前に、言うべきだった。

俺の中では、答えは出ていたはずなのに。

行動を起こすべきだった。

そうすれば、絵里を傷つけずに済んだ。

「悪い。あの噂も何もかも俺が悪い。」

「……健吾。あの噂、ホントなの？……」

「本当だ」

「信じられない。」

「……本当だ……」

「健吾が学校で誰かとキスしたただなんて、信じてなかったけど。。。」

「ごめん。」

「私には、そんなこと今までなかったのに」

「悪い」

「人前とか、誰かに見られるとか、考えなかったの？」

「……」

「ねえ！……」

「あいつを前にしたら、そんなこと思わなかったんだよ。」

「つい、やってたんだ」

「ついつて。そんな風に言うなんて」

「絵里には悪いと思ってる」

「私には、ついつてという言葉がつくほど、

何かを衝動的にしてくれた事あった？」

「.....」

「いつも、余裕たっぷりで、少し距離を置いてたじゃない」

「.....」

「それがもどかしくて不満だったけど、健吾はそうなんだって、健吾はそういう人なんだって思ってたのに。。。」

「.....」

「私だから、そうだっただけで、その子だと、

健吾はつい！って気持ちが動いちゃうんだ！」

「ごめん」

とにかく、俺が悪いのは事実だ。

謝るしかない。

「誰？ 誰なの？」

「.....」

「健吾、それぐらい教えてくれたっていいでしょ」

「ダメだ。それだけは、教えられない」

「.....」

伝えなければ。この場ではっきりときっぱりと。

「絵里。別れよう」

「いや。私、納得できない。別れない」

「俺たち、こんなことがなくなったら、きつと別れてたと思う」

「どうしてそんなこと言うの？」

「ずっと、うまく行ってなかったからさ」

「そんなこと……」

「絵里は今、他の事に夢中だろ？」

「それって、私が悪いつていうの？」

「いや、そうじゃない。でも、こんな事に時間を割かれるのは不本意だろ？」

「逃げるの？」

「そうじゃない……」

どういえば、絵里は納得してくれるんだろう。

「俺は、もう続けるつもりはない。別れよう」

「その子と付き合うの？」

「わからん。」

「どういふこと」

「でも、そうなると思う。」

「俺はそうしたいけど、断られるかもしれない」

「私は騙されたけど、その子は騙されていないといいわね」
「？」

「健吾が真面目が取り柄の男だけじゃないってね」

「誉めてくれるのか？」

「けなしてるのよ……」

絵里はいつものようにきりっとした目つきで俺を見ている。

「あの噂、打ち消そうか？」

「いいわよ、そのうち消えるわ。もうすぐ、夏休みだし」

「分かった」

「じゃあね」

「ああ」

絵里は2、3歩進み、振り返った。

「ねえ、私の事、好きだった？」

嘘でも答えるべきなのかもしれないが、言葉が出てこない。

「やっぱり、健吾ね」

毅然と去って行く絵里の黒髪を見ながら、片平のくるくる巻き毛を思い出した。

あのくるくるは俺が指を通すと、まっすぐになるんだろっか？

自分でも、鬼畜な奴だと思った。。。。

2学期に入って。。。 S 1 2

やっと、2学期が始まったわ。

この休みの間、散々お姉ちゃんの練習台として、髪を遊ばれた。真っ黒に染められ、ストパをあてられた。

なんでも、新しいストパの方法が開発されたんだって。

自分としては、久々黒髪で違和感、感じまくり！

今朝から、鏡の前に、何分いたかしら？

お姉ちゃんに嫌がられるほど、きいちゃった。

「おかしくない？」

久々にクラスに入るのってただでさえ、緊張するのに、この髪。

いつも以上に、勇気がいる！

ほとんど、クラスの面子そろってる！

うー、家でぐずぐずしすぎた。

「おはよう」

何、私、何かおかしい？

なんで、みんながこっちを見てるの？

「片平？」

「うん、榎田、おはよう」

「あ。。ああ、おはよう」

「何？顔に何かついてる？」

榎田がじつと見てくるから、すっごい、きまづいじゃない。

「片平が茶髪じゃないの、初めて見たかも。。。」

「そんな、大げさな」

「いや、ホント」

「入学式の日は、黒髪だったわよ」

「。。。。校則違反だよな」

「それ、言わないで！」

榎田は、ニカツと笑いながら、

「でも、可愛いじゃん」と

おちゃらけて言いながら、朝から必死でセットした髪の毛をくしゃくしゃにしちゃったの。

もう、なんなのよ！

そんなに、この髪似合わないかな。

みんな、じろじろ見るくせに目が合つとそらしちゃうの。。。

「由利。やっぱり変かな。この髪。。。」

「あんたね。。。。いいんじゃない。。。」

「ホント？ホントに？」

「そうよ、よく似合ってるよ」

由利が呆れたように言うけど、彼女は嘘はつかない！
安心した。

始業式の後、体育館からクラスへ戻る途中、山科君を発見！
相変わらず、このくそ暑いのに、涼しげな、真面目腐った顔で歩いている。

こっちを向かないかな〜・・・。

あれ？どこ行くの？

なんで、どうして、その女子の後をついていくの？

あっちは、告白のメツカのある階段のある方向。。。
ということとは・・・！！

「1組の笠井じゃん」

「由利、知ってるの？」

「1年の時同じクラスだったからね。ふ〜ん、あのおとなしい笠井がね〜」

「何？」

「きつと、告りに行ったのよ」

「え！嘘！どうしてそう思うの？」

「山科、スポーツ大会の後から、じわじわ人気が出てきて、
極めつけは、あの噂！そして、彼女と破局したらしいよ。一躍時の人だね〜」

「・・・そう」

「うん。そうらしい。吹奏楽部の子が言ってたって」

「そうなんだ。。。。」

「いいの？再アタックは？それで、あの告りは、ほっとくのっ？」

「え！ああ、そうだね。うーん、でも、邪魔するのもどつかと思っし……」

「あら、余裕じゃん！」

「……そつでもないけど。」

思わず目がキョドってる？

由利の鋭い視線が私を貫いてるわ！

「吐きな！」

由利！

ここは取調室じゃないのよ。

そんなベテラン刑事見たいなセリフ……。

「芹！」

「……はい……」

まだ、由利には言ってなかったんだけど、この夏休み、山科君から告られました。

もちろん、OKしたに決まってるでしょ！

2学期に入っ。。。。S12(後書き)

ひさびさの更新です。

お気に入り登録頂いている方、

まだ、目を留めて頂けるでしょうか？

お話の雰囲気少し、いえいえ、がらっと違っていかかも。。。
時間が開くと、こわごわ更新です。

2学期には。。。。 K12

この光景はわずか数ヶ月前に体験したばかりだ。

「好きです。付き合ってください」

「いや、無理！俺、付き合ってる子いるし」

「でも、彼女とは別れたって。。。」

「ああ、そいつじゃないよ。別の子」

「ええ！誰ですか？」

「内緒！」

「。。。。。」

「悪いな。」

こういう場面はホント、気が重い。

夏休み中にも、呼び出されて、告られた。

まいる。。。。。

前はこんな事なかったのに、あのスポーツ大会が諸悪の根源だ。

夏休みはいつてすぐ、片平とあの児童館で会った。

その帰りを待ち伏せして、驚いている片平を拉致って、近くの公園で告ったやった。

公園なんて ベタすぎる。王道だ！

思い出すだけで、気恥しくなる。

「山科君どうしたの？」

「5月の告白は、まだ有効？」

「？」

「有効じゃなくても、別に構わないけど」

「どういう事？何が言いたいなの？」

文字通り大きな目をまん丸にさせて見上げてくる。

「今度は、俺から告らせて」

「？」

心臓がバクバクした

片平もきつと同じぐらいバクバクしていると感じた。

だって、あいつの顔、あん時のあの目ん玉、緊張してますって顔してた。

「好きだ。」

つい、構ってしまいたくなるほど、好きだ。

つい、驚かせたくなるほど、好きだ。

そして、つい、キスしたくなるほど、好きだ」

思い切って、すべてを言いきった。

おい、おい、驚いてないで、早くなんとか言ってくれ！！！！

こんな俺、自分でもどうかって思うくらい緊張してるんだから。。。

片平は、ギョツと目をつぶったかと思うと、突然抱きついてきた。
ぐえ、苦しい。

小さいから俺の首にぶら下がるように抱きついてる。

「私も、大好き。前よりももっともっと好き。」

俺は、思わず、いや、ついだな。つい、抱き上げた。きつと片平は、足が地面についていなかったらう。

「付き合ってくれるか？」

「うん！お付き合いしたい。カレカノになりたい」

いま、思い出してもマジで恥ずかしい。

でも、やっぱりその時も、俺は、ついキスをしていた。

唇が離れるなり、顔を赤くした片平は

「これから、よろしくお願いします。健吾君」

「こちらこそよろしく、芹香」

あま〜い、キスをプレゼントしてやった。

ちよつと、キザ過ぎっかな〜？

でも、芹香と一緒にいると甘やかしたくなるんだよね〜。

俺、キャラ変わったね？

文化祭 ようこそクレープ屋へ。。。 S13

高校生最後の文化祭、クラスの男子たちは何としても、
メイド喫茶をしたかったらしいんだけど、あえなく、2組にとられて
私たちはクレープ屋さんに決定！

メイドをあきらめられない男子は、何を思ったのか、
「メイドが作るクレープ屋」なるものを、再挑戦したみたいだけど、
当然の如く、却下されて、がっかりしていた。

そんな男子に、由利が一言。

「ホント、男子って子供ね！」

おおー、由利こそあんたいくつよ！

煙草をくわえたOLのお姉さまみたいよ！

文化祭か。。。

この時とばかりにカップル成立！って多いのよ。

だって、後夜祭は有志のバンドをカップルで盛り上がるってのが、
我が校の恒例だし、この後に続くクリスマスを視野に入れるなら、
ここで、カレカノになっていないと、
逆算すると難しいのよ！

健吾君、また、告られたらどうしよう。。。。

そうそう、ちなみに、健吾君の4組は、かき氷屋さん！
絶対食べに行っちゃおうぞ！

ウチの高校は、文化祭にはクラス単位でお揃いのTシャツを作るのが恒例になっていて、

今年は白地に担任のエッチャンの似顔絵のプリント入りなの。

これが、結構似てて、思わず笑っちゃうわ。

同じTシャツを着ているだけで、連帯感が強まるから不思議よね！

ホットプレートに生地を薄く生地を流し込み、

トッピングを置いて、くるくる巻いていくだけなんだけど、

これが結構難しい。

コツがいるのよね。

。。。
榎田と二人一組のペアになって、クレープ作る事になったんだけど。

「片平って見かけによらず不器用だな」

「ウ！言わないで。気にしてるんだから」

「ほら、俺が巻いてやるから、片平は、生地をひいて」

「うん、でも、これも結構・・・」

「おい、生地タネ入れすぎ！」

「あ！ごめん」

「ホットケーキみたいになっちゃまうぞ」

「ええー！でも、これはこれで・・・」

「そんなこと言っつと、すぐに生地タネなくなっぞ！」

榎田を師匠と仰いで、少し練習もしたけど、

全然上手にならなくて、ついにはほとんどを榎田がやってしまっ事に。。。。

私も、少しは出来るし、やりたいのに。。。。

そりゃあ、榎田が作った方が見栄えもよく出来てるけど。。。。

榎田って以外に繊細で器用なんだわ。

うん。あんたを見直した。

あ！健吾君だ！

食べに来てくれたんだ！

一緒にいるのは、石ちゃんだわ。

あの二人、仲良しなのかしら？

「いらっしやい！」

「おお！芹香ちゃん、バナナチョコクレープ頂戴！」

う！石ちゃんにニッコリ笑って《芹香ちゃん》なんて呼ばれてしまったわ！

いつの間に、私たちそんな中に。。。。

一年生の時に一緒にクラスになった事はあっただけ。。。。

ちよつと！やめてよね。健吾君に誤解されちゃうじゃない！
それに、バナナチョコクレープって……似合わない！

「山科君は？」

「……おれ？……やめとく。」

なんですってー……？

じゃあ何しに来たの？冷やかし？

それとも、もしかして私に会いに来てくれたの？

だって、カレカノになつたんだもんね。

彼女の事が気になつて仕方ないって感じ？

だけど、健吾君、全然、学校でイチャイチャしてくれないし、
彼女がいる時に告つたのは事実で、少し略奪？っぽいから
私も元カノさんに気がねして、自分から中々寄って行けないから、
周りからは二人がカレカノになつたと認識されてないのよね。

ハア……。何か事件でも起きて、こつ、ペアと
広まらないかしら？

おつと……。ぼんやりしちゃった！

「榎田！バナナチョコーっ」

「OK」

榎田が本当に器用にちゃちゃっと作ってあっという間に出来上がり！
うっん、プロ並み！

あゝあ、私も作りたい。

密かにクレープ屋さんって楽しみにしていたのよね。

それなのに、榎田は自分ばかり作っているんだから……。

とくに健吾君には作ってあげたかったわ！

「はい。200円ね」

「…………サンキュー…………」

あら？石ちゃん浮かない顔ね。

頼んでおきながら、甘いのが苦手なのかしら？

「片平、俺、やっぱり、イチゴチョコ」

「えーいらなかったんじゃないの？」

「いや、いる！」

「榎田！イチ」

「片平が作って」

「…………榎田の方が上手だよ」

「いんや、片平が作ったのが食べたい」

「…………OK頑張って作るね」

キャン！

健吾君にこんなこと言われちゃうなんて！

うーん、腕が鳴る！

榎田が苦虫を噛み潰したかのような顔で、じっと健吾君を見ているけど、

気にしない。気にしない。

だって、今まで、ずっと榎田作ってたじゃない！

健吾君の分ぐらい、作らしてくれたって、いいと思う！

だって、彼氏なんだから！

会心の出来栄えに満足だわ！

「はい、お待たせ！2000円ね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ああ。アリガト」

健吾君と石ちゃんが、無言で出来あがったクレープをじっと見つめてるわ。

少しサービスし過ぎたのが、ばれたのかしら？

文化祭 ようこそクレール屋へ。。。。 S13 (後書き)

まだ、続いていたんです。。。。

今さら、更新？

それに『文化祭』って。。。なんて、時期はずれな。。。。

お気に入り登録頂いている方、

さらっとでも目に入れて頂けると、嬉しいです。

文化祭 クレープの甘さに。。。。 K13

高校最後の文化祭が、かき氷屋か。。。

俺は、氷かき専門だな！

文化祭か。。。。

これを機に、一気にカップルが増えるんだな？

この辺で、カレカノになった事ばらすべきか？

芹香は無防備で、鈍感だから危なすぎる。

芹香とはカレカノになったはずなのに、

全く校内では俺に寄って来ない。

何でだ？

以前の方が、もっとちよくちよく俺のクラスを覗いていたと思うし、意外な所でストーカーされていたのに、今は、遠巻きに見ているだけだ。

何でだ？

そして、その横で、芹香の親友兼ボディガードの近藤は俺を射殺さんばかりに睨んでいる。

何でだ？

女ってのは、分からんな。

まあ、俺も絵里の手前、あんまり、校内で大っぴらにするのは、気が引けるから、自分からアクション起こす事もしてないんだけど。

でも、土曜日の午後のデートは欠かさし、学校から離れた公園で待ち合わせしてぶらぶら帰ってるのも結構面白いかな？

だけど、俺だって健全な青少年だ。

そろそろ次の段階に進んでも、いい頃だろう。

芹香は見た目ほど、チャラってないようで、まるで、中学生のような清くい、お付き合いでニコニコ嬉しそうに満足している。。。と思う。

だが、演技かも？

そして、もしかして、俺をじらす作戦か？

押し倒しをまっているか？

芹香に対して、なぜだか小心者の俺はグダグダ考える日々を送っている。

揃いの黒いＴシャツで午前は、店番から外れた俺は、なぜか津田沼と二人でぶらぶら校内を回っている。

背が高いほうの俺と、横が広いほうの津田沼が二人で歩いているとにかく目立って、同じ学校の奴らは珍しい組み合わせに吹き出しそうな顔をしているし、

他校の生徒は、俺たちが通ると道を開けるように脇へ寄っている。見ようによつては、怯えた顔をしていると思うのは、俺だけか？

「なあ、山科。俺だけには、教えるよ。

あの噂の相手、だれだよ？」

「あんな噂、デマだ。信じてるのか？」

「いや、だって、結構信憑性高いだろ？」

山科、見た目ほど、真面目じゃないしな。」

「なんで、そんなことわかるんだ？」

「俺、格闘技は何でもすきなんだよね。」

彼女無しで暇だから、いろいろ大会見に行くんだ。

その中には、少林寺もあってさ……。」

ニヤリと笑う奴の顔は、まさしく、柔道部の猛者を黙って従わせているあの笑顔だ。

「誰にも、言うなよ」

「なんで、黙ってるかね？」

あの姿さらしたら、結構いい線行くかもしんねえぞ」

「何のいい線か、わからんが、まったく興味ない。」

それより、変な言いがかり付けられる方がめんどくせえ」

「へえ。そんな風に思えるなんて、羨ましい限りだね。」

俺には、その気持ちまったくわからん！」

。。。。
武道をやっている者同士、一応わかってくれるとは、思っていたが。

津田沼の辞書には、『察する』なんて言葉は書かれていないらしい。

「それより、6組のクレープ屋に行こうぜ！」

「。。。。。」

芹香の組か？

津田沼は俺の答えがかえってくるとは思っていないのか、それとも柔道部主将に刃向う奴はいないと思っっているのか
スタスタと歩いていく。

「クソ！榎田の奴、俺の芹香ちゃんにベタベタしゃがって！」

おおー！お前の妄想か？

芹香がいつから、《お前の》になっただんだ？

ただ、津田沼の笑顔が消えて真顔で言っただけのけるあたりが、やっぱり怖い。

こいつが、もし、芹香に告りでもしたら、恐怖のあまり、頷いてしまつかも？

もしかしたら、俺は日陰の身か？

「おお！芹香ちゃん、チョコバナナクレープ頂戴！」

言いやがった！

面と向かって、名前をちゃん付けで呼びやがった。それに、チョコバナナって、似合わんだろ！

津田沼の渾身の笑顔に、芹香の笑顔がひきつっている。

おい、一瞬固まったぞ！

芹香は、6組揃いのTシャツを着てる。

当然だが、榎田とお揃いだ。

面白くない。いや、面白いはずがない！

「山科君は？」

二人の時は『健吾君』って嬉しそうに呼ぶくせして、『山科君』って

ナンダそれ、おもしろくねえ！

俺、甘いのが嫌いなんだよね。悪いとは思って、売上に協力出来ない。

榎田が器用にクレープを巻いている。

あいつは何やらしても、ソツがねえな！

およ？ 芹香？ もしかしたら、作らしてもらってねえのか？

うらやましそうに、榎田を睨んでいる！（笑える！）

まあ、榎田にしちゃ、芹香の作ったのを人に食べさせたくないんだろ。うけど。。。。

心の狭い奴だな！

（だが、俺も人の事言ないけど）

芹香の手製が食べれるかと思って期待していた津田沼は意気消沈している。

ちよつと、遊んでやるか？

「片平が作って！」

あゝあ、嬉しそうな顔してくれちゃって！

こんなことで喜んでくれるなら、いくらでも喜ばせられるな！

単純な、芹香がとんでもなく可愛い！

それに引き換え、榎田。おまえ、表情に出すぎだぞ！

喜々として出来あがったクレープを見て、
俺の考えが間違っていた事に気付いた。

クレープというより、ホットケーキかどら焼きの生地に
イチゴとチョコがてんこ盛りだった。

俺は、それを見ただけで、甘さに吐き気がしてくるようだ。

さすがの津田沼もあまりのひどさに驚いて、
お誉めの言葉も出てこない。

榎田！俺が悪かった！

お前は、こうなる事がわかって芹香にさせなかったんだな！

まあ、仕方ないかと、水で流しこむように完食したさ！
横で、津田沼が一言ぽつり。。。。

「おまえ、甘党だったんだな」

何ほざいていやがる！

『察しろ！』お前の辞書に俺が書き込んでやる。
だって、しょうがないだろ。

可愛い彼女が俺の為に作ってくれたんだから。

文化祭 クレープの甘さに。。。。 K13 (後書き)

K (健吾) バージョンの方がなぜか、書いていて楽しいです。

こんな男子いるかな？。

妄想と希望が入りすぎですが、

文化祭編、読んで頂けると嬉しいです。

やっと、交代の時間が来た。

さっそく山科君のクラスに突撃よ！

確か、かき氷屋さんだったかしら？

由利と一緒にいこうって誘ったのに、

『芹のニヤついた顔見たくない』とピラピラと手を振って
勝手に行つて来いとばかりに追い出された。

うーん、結構繁盛しているとみた。

順番待ちができて、クラスの前は人ばかり。

お！いたいた。健吾君が涼しい顔をして氷をかいている。

その横は、やっぱり石ちゃん。

あの太い腕がグルグル回つてあつという間に

かき氷が出来あがつていくのを見るのは、圧巻だわ！

ポーンとみてたら突然、氷がふつてきた！

「キヤ！冷た！」

「悪い片平、手が滑つて」

目の前の男子が躓いた拍子にかき氷が私の白いＴシャツにこぼれていた。

みると、イチゴ味だったのか、ピンクに変色したＴシャツから、下着が透けて見えてしまっている。

水色のブラのレースの形までくつきりとわかる。

男子たちがニヤニヤしている。

い・いやらしい！

その目つきやめてよ！

どうしよう・・・。。。

制服のブラウスはロッカーに入れたままで、
貴重品と一緒に先生に鍵を預けちゃってるし。。。。
この恰好で隣棟の職員室に行くのは勇気がある。

どうしよう・・・。。。

う！泣きそう。

涙ポロリは絶対我慢しなきゃ。

わ！頭から何か振ってきた。

今度は、ふんわりひと肌に暖かい黒い布だった。

「着とけ！」

上半身裸の健吾君がいつの間にか目の前にいた。

ちよつと、お腹の腹筋が割れてる！

え！その姿、人目にさらさないで。

もったいないじゃない！

女の子の目が健吾君にハートマークだわ。

くるりと背を向けるなり、氷をこぼした男子の胸倉を掴んで
すごい勢いですこんでいる。

「お前ら、芹香にわざとこぼしただろ！」

「や・・・山科。。。ちよつとした悪戯だよ」

「悪戯？誰が芹香に悪戯していいって言った？ん？」

「や・・・山科。。。」

横で、健吾君が怒っている。

すんごく怒っている。

こんな表情をしているのは、見たことない。

「芹香、早く着ろ！」

「う・・・ん」

大きすぎる！！！！

半袖のはずなのに、肩がずり落ちて袖が肘まできてるし、
スカートが必要ないくらいTシャツが長いわ！

着るといつより、着られてる？

「芹香に謝れ！」

いつになく、健吾君の低くて不気味な声が教室に響いている。掴まれている男子はもちろん、その周りもビビって引いている。

マズイ！

マズすぎるでしょ。

健吾君が極悪人キャラになってる！

うわ！なんとかしなきゃ！

「いいよ。大丈夫だから」

「いや、良くない。それに俺が許せねえ！」

ますます、超・極悪人健吾になっている。

細い目元が、一層細くなつて・・・うう怖い！

まるで「ミナミの帝王」の萬田みたい・・・。

ガン！

びっくりした。

何事かと、その方向を見やれば

健吾君が近くの椅子を蹴飛ばしたみたいだけど、あっと今に教室の隅へと転がって行った。

「ごめん。山科」

「謝る相手が違つたろー！」

「……………」

ギロリと音が出るほどにらんでいる。

縮みあがるってこつこついうことを言うのね。

「片平……………。悪かつた」

「う…………ん」

男子は、本当に悪いと思っているようで、謝ってくれた。

健吾君がやつと男子から手を離れたのを見て、私もホツとしたわ！

石ちゃんが、蹴飛ばされた椅子を元の位置にもどしながら

ニヤニヤとした顔で、片肘を山科君の肩に置いて、聞いてきた。

「もういいだろ。」

どころで、山科。『芹香』って何？」

健吾君は、一瞬しまったって顔をしたけど、きつとそれに気付いたのは私だけだと思う。

さあ、どうするのよ！

騒ぎを聞きつけて集まった2重3重の人垣のギャラリィを見渡した。
どうやって、この場をおさめるの？

健吾君、あんたの腕前を見せてもらおうじゃないの！

少しは彼のうろたえた可愛い顔が見れるかと思ったけど、
がっかりだわ……。

さすが健吾君。

いつもの澄ました表情で言い放ちやがったのよ。

「芹香は、俺の彼女だ！」

一瞬静まり返ったのち、驚きの声が充満した。

キヤー！

私、今、どんな顔してる？

文化祭 かき氷屋さんへ。。。。S14(後書き)

まだ、文化祭編、続いています。

かき氷か。。。。。

ちよっと季節外れですね。

「ミナミの帝王」。。。。ご存知ですか？

TVでドラマやってます。

ついつい見てしまつ日曜日の午後です。

文化祭 かき氷が。。。。 K14

かき氷屋は思ったより忙しくて重労働だった。

この季節にしては、天気が良いすぎて、バンバン売れて行く。

氷をかいてもかいても、客はいなくならねえ。

電動のかき氷マシンは一台だけで、

後は手動で男どもが代わる代わるクルクルしている。

委員長の有田も、最初は頑張っ腕まわして氷かいていたが、あいつの細腕はすぐにプルプル震えだして使い物にならなくなった今は、もっぱら、会計で釣銭勘定だ。

一人一人、脱落者が増えてくる。

女子の黄色い呼び込みにどんどん人が寄ってくる。

津田沼はここぞとばかりに本領発揮で、太い腕がグルグル回っている。

女って怖いよな。

あの津田沼を掌で転がすように上手におだてて、
どンドン腕を回させている。

男には絶対に無理だ。
津田沼よ、さすがの柔道部主将でも明日は腕が痛いと思うぞ。

まあ、スポーツ大会で女子の黄色の声援を浴びれなかったんだから、今日は、目え一杯浴びてくれ！

「芹香ちゃんだ」

「片平じゃん」

男子のこそそと囁く声が聞こえる。

ん？

やな予感だ。

人の彼女をそんな目で見るな！

芹香に声をかけに行こうと思い、今、回している氷を素早く終えるべく、

俺は他の男どもに氷を投げつけてやりたい思いを必死でおさえて、かき氷機を回し続けた。

「キヤ！冷た」

何事だ！

芹香の、驚いた声だ。

彼女に目をやると、胸からお臍までピンクのかき氷で零れていた。

それを先ほどの奴らが、面白半分に見ている。

無意識だった。

かき氷を投げ捨て、黒のTシャツを急いで脱ぎながら、急いで芹香の傍にいつて、放り投げていた。

そして、一番の首謀者であろう高橋の胸倉をグイッと掴んだ。きつと奴はつま先立ちだったに違いない。

高橋の目を見張った顔が俺の目の前にある。

「お前ら、芹香にわざとこぼしただろ！」

「や・・・山科。。。いや、グ・偶然だって」

「偶然だって？ああ？お前、しれっとそんな事良くも言えるな」

「い・・・いやあ。ちよっとした悪戯だよ・・・な？」

高橋は必死で、他の奴らに同意を求めている。

そいつらを見ると、うんうんと頷いていやがる。

何が、うんうんだ。

そんな仕草で、俺が許すと思っているのか？

「悪戯？誰が芹香に悪戯していつて言った？ん？」

「や・・・山科。。。」

ああ？ 芹香に悪戯していいのは俺だけなんだ。

それに、白いＴシャツの下に来ていた薄い水色のレースフリフリのブラをお前たち見ただろう。それも俺より先に！

俺はこれまで持てる限りの精神力で、自分を押さえつけその欲望を必死で我慢していたのに、お前ら、よくも！

チラッと芹香を振り返ると、ポカーンとアホ面曝^{あほまへばく}して俺のＴシャツを胸の前に当てている。

何やってんだ！

「芹香、早く着ろ！」

芹香が悪い訳じゃないが、腹が立つ。お前は無防備すぎなんだ！

自分がどれくらい男子から注目を浴びてる存在か分かってねえのか！

「芹香に謝れ！」

高橋達は怯えたように見上げている。

取り成すように芹香の声がした。

「いいよ。大丈夫だから」

何がいつて言うんだ！

他の男に下着を見られたって言うのに、何言ってるんだ！

それも俺より先に！俺より近くで！許せねえ！

芹香への八つ当たり同然の怒りと

この高橋達への怒りはどうにもこうにもおさまりそうにない。

そうしてくれと言わんばかりに傍にあった机を、思いつき蹴飛ばした。

派手な音を立てて、教室に隅に転がっていった。

高橋達はそれはそれは、飛び上がらんばかりに驚いて、
芹香に詫びを入れていた。

「片平……。。悪かった」

「う……ん」

これからは、芹香に悪戯しようなんて命知らずな奴はいないだろう。

俺はおもむろに高橋の胸倉を突き放した。

津田沼が倒れた机を元に戻しながら、ニヤニヤと俺の肩に肘をついてきた。

おい、格好付けているつもりかも知れないが、お前の方が小さいんだから、その格好はかえってイカンやる！

「もういいだろ。」

ところで、山科。『芹香』って何？」

津田沼、この場でそれを俺に言えるのはさすが大物だ。

カツとなって見境なしの言動に少しばかりバツが悪かったが、ここで宣言しておくのも、かえって好都合だ。

おお、ギャラリィも大勢いるしな！

「芹香は、俺の彼女だ！」

一瞬の静けさの後、悲鳴とも驚きとも言えない声が教室を占領した。

その声には、どんな思いが含まれてんだ？

そして、芹香、その顔、何とかしろ。

可愛い顔がおバカさんに見えるぞ。

文化祭 かき氷が。。。。 K14 (後書き)

文化祭編 これで終了です。

季節外れの話ですみませんです。

次は石ちゃんから見た話を挟もうかと思っています。
うまく繋がれるといいのですが。。。。

良ければ、お暇な時間お立ち寄り頂けると嬉しいです。

石ちゃんの独白。。。 T1

いや。

山科って面白い。

『芹香は俺の彼女だ』

まさか、この文化祭のギャラリ一杯のこの場所でこうくるとはね。
やってくれるじゃん。

同じクラスの山科健吾。

見かけは真面目な優等生。

先公に隠れて早弁はしないし、居眠りもしない。
制服のボタンはキチンと上までとめていやがるし、
AVの視聴会にも参加しない。

部活に入ることなく、誰とツルむでもなく、
放課後になるといつの間にか居なくなっている。

目立たないが運動神経は抜群で成績も優秀。

大学も国公立を楽々だろう。

そんな山科を意外な所で見かけたのは、2年の冬休みだ。

彼女イナイ歴、ン年、いや正確には、生きてきた年数と同じだが、その俺は部活のない日は常時、暇を持てあましている。

柔道が一番だが、格闘系が好きな俺は、近くで行われる大会は、種目を選ばず見に行っていた。

その日も、隣町の体育館までプラッと暇つぶしがてら足を伸ばした。

少林寺拳法

俺の中では、未だにその言葉からブルース・リーしか思い浮かばない。

貧困な発想だ。

一際動きのいい、背の高い奴が目に入った。

二人一組で取り組みをしている。

『組演武』っていうやつか。

かなり練習をしているんだろう。

相手にダメージを与えないようにしていると分かっているけど、その迫力にビビる。

そして、学校では見られない鋭くて、熱い目つきで山科がそのコートに
白い胴着まとして、相手と向き合っていた。

いや、その時の俺の驚きといったら半端じゃなかったと思う。

あの、少し嫌味なぐらいの優等生面した山科はどこにも見当たらなかった。

ただ、一心に武道に向き合っていた。

俺は、その日から、山科観察を始めたんだ。

吹奏楽部の部長の逸見絵里と付き合っているらしいのだが、
一見お似合い風に見えるが、俺には二人の冷めた関係が面白くない。

逸見も校則をきっちり守った学生さんだ。
スポーツ大会のバスケット会場で二人一緒にいるのを見たが、
どう見てもラブラブには見えなかったなあ。

山科は逸見より、どこかよそを気にしていた様と思う。
奴は、彼女の前でもあの面白くなさそうな顔で頷いていたっけ。

おいおい、俺は高校生のバカっふるを見たいんだよ。

山科のあのすかした顔つきを、誰かくずしてくれねえかな〜って
ずっと思っていたさ。

山科と同じ中学出身で後輩の高本に耳を寄せてそつと聞いたね。

「おい、高本。山科って、中学ではどうだった？」

「え？山科さんですか？」

「おお、知ってるのか？」

「知ってるも何も、同中で山科さんを知らない奴いないっす」

「何で？あいつ目立たないのに、なんで学年違う奴まであいつの事
知ってるんの？」

「……………」

「何でだ？」

「……………」

何か不味事があるのか？

俺は高本が言いやすくなるように、やんわり笑いかけてやったさ。

「い…………いや…………。同中から来てる奴この学校少ないから、
あまり、言いたくないんすけど…………。」

「ん？でも、言うだろ」

「はあ…………。中学ん時、嫌な先公がいて、そいつ、おとなしい
生徒に対して

いつもねちねち嫌味を言う奴だったんすよ。

まあ、弱いものいじめですよ。一種のパワハラ？ですか？」

高本、おまえ、『パワハラ』って言葉を使った時、
《俺こんな言葉知ってますよ》的な得意そうな顔しただろう。

俺だってそれぐらい知ってるわ。

「先を続けるよ」

高本は急いで話を繋ぎだした。

「ある日、黒板にその先公の悪口を書いたやつがいて
その生徒じゃないのに、そいつをここぞとばかり、いじめだしたん
すよね」

「ふ〜ん。やな先公だな」

「でも、誰も知らんぷりで、そいつ泣きだしちまって、それでもそ
の先公、
いい加減にすれば良かったのに、やめなかったんすよ」

「それで？」

「その時、山科さんが、席から立って、黒板を肘で一突きしたんで
す。

そしたら、黒板へこんじゃって、それぐらいすごい勢いと力だった
らしいですよ」

「なるほど。それで？」

「その後、山科さんが、先公に向かって蹴りを入れたんです。
もちろん、顔面寸止めですよ。

でも、その先公、ビビって腰抜かしちゃって、大声で何か喚くわ。
他の先生は来るわ。女生徒は悲鳴を上げるわで、もう大騒ぎ。」

「まあ、そうだろうな」

「少林寺やってる事がそこではれて。山科さんの保護者も呼ばれて。
皆も、山科さんに刃向うべからず見たいな雰囲気の流れでしまっ

て。」

「なるほどな」

「いまだにその後が黒板に残っているし、どんどん噂が独り歩きして、

母校じゃちょっと伝説みたいに受け継がれた話になってるそうすよ」

『強きをくじき弱きを助ける』

中学生での、その行動は一躍ヒーロー扱いだろう。

迷惑千万この上ない！ってやつだな。

高本の話で、今の山科の態度が分かった気がする。

とにかく、高校生活を穏便にひっそり、目立たず暮らしたいと今に至っているわけだ。

でもな。山科、もっと高校生活エンジョイしなきゃ！

3年生で一緒のクラスになった時に、俺は山科の高校生活を突りあるものにしてやろうと、心に誓った。

でも、そんな俺の熱い友情よりも、芹香ちゃんがしてくれたようだな。

残念だが、俺のアイドル芹香ちゃんは、お前に譲るぞ。

少しだけ、お前はよお。意地悪されちゃってくれよ。

このまま、みんなの芹香ちゃんを奪っておいてお咎め無しだなんて、

まさか、思っていないよな。

せいぜいバラ色の高校生活をおくれ。
お前はいい親友を持って幸せだぜ！

イエーイ！

石ちゃんの独白。。。。 T1（後書き）

石ちゃん、ノッてましたね。

ちなみにサブタイトルの「。。。。」の後の「T」は
石ちゃんの本名『津田沼』の頭文字でした。

う! 苦し。。。。。
帯が。。。。。

お姉ちゃん、気合い入れ過ぎ!

今年の夏祭りに、健吾君と行くっていったら、
早々に、美容院を早退して帰ってきた。

社会人よ! そんなことでいいのか!

それも、手には新しい浴衣と帯。

浴衣は、白地に朝顔の花が咲いている。

紺と黄色の帯はどっちを使うのだろう?

でも、さすがプロ。

髪をまとめて上げるのといい、おくれ毛の散らし方といい絶妙!
だてに、お金はもらってないわね!

帯も文庫をアレンジして、可愛い小さめのお花を帯の端であしらっ
た結び方。

ギョツと締められると、グエって感じ。。。。。
でも、あれ? あんまり苦しくない。

これなら大丈夫だろう。

姿見の前で、思わずニッコリ！
うん！決まった。

お姉ちゃんも私の周りを人工衛星みたいに回って、
顎に手を当てて、云々と偉そうに頷いていた。

自分の作品の出来栄はいかがでしょうか？

「完成かな！ いい感じ。 これで芹香のカレも鼻血ブーものね！」

お姉さま、あなた、その言い方って。。。
もはや親父ですか。。。

「でも、言うておくけど、間違っても帯を解くようなことしないで
ね」

ひえーーーーー！

それって、お姉さま。

不純異性行為（古！）を言ってるんですか？

健吾君は真面目だから、大丈夫です。ハイ！その点は安心して下さい。

「それで、芹香のハツカレのケンゴ君ってどんな子？」

よくぞ聞いてくれました！

健吾君はね。。。。

《ピンポン》

インターフォンが鳴った。

あ！健吾君のお迎えだ！

「お姉ちゃん。ありがとう。行ってくるね」

「芹香。あまり遅くならないでね。」

「わかってる」

いそいそと小走りに玄関に向かう。

あれれ・・・？ お姉ちゃん？

いつもは、見送るなんてことしないのに、玄関の外までもお見送りしてくれるの？

玄関を開けると、門の外に、健吾君が又ボーっと立っていた。

キヤーーーー！

健吾君だ。

今日は、デッキシユーズに色落ちのジーンズ、空グレーのTシャツ姿。

う！爽やか！

鼻血ブーは私の方かも・・・。

「こんばんは」

「芹香の姉です。」

「山科健吾です」

あらあら、私を挟んで、挨拶ですか？
健吾君珍しく、愛想良しじゃない。

うん！ 好青年をアピールね。

「じゃあ、行ってくるね」

お姉ちゃんを振り返り、下駄の音を鳴らそうとした時、
お姉ちゃんが呼び止めた。

「芹香！」

おいでおいでって手をひらひらさせてる。 何だろっ………？

お姉ちゃんに近寄っていくと、私の髪を直すふりをしながら、耳元
で囁いた。

「いたって普通ね！ 顔も服装も無難すぎる」

ムキーーーーー！

人の彼氏ほっというて！

私の目が釣り上がったのを見て、お姉ちゃんが笑った。

「楽しんでおいで。 下駄、気をつけてね」

なんやかんや言っても、お姉ちゃんは優しい。

「うん。ありがとう！ 行ってきますす！」

健吾君はすぐそこにいるのに、下駄でうまく走れないのが、歯痒い！

早く早く、健吾君と手え繋ぎたい！

「お待たせ！」

健吾君がじつと見ている。

何？何何？

変？

浴衣、似合わない？

ちよつと・・・どうしよう。

着替えた方がいい？

もしかして、夏祭り＝浴衣と思ったのは間違い？

健吾君が、ギョツと手を握ってきたので、見上げると健吾君？

あれれ？ 顔赤い？

もしかして、照れてる？

健吾君が何も言わずに歩き始めた。

手を引かれて私も、ついていく。

オイオイ、何とか言ってよ！

でも、手を繋いで歩く。ただ、それだけで、すっごく、ウキウキす

る。

角を曲がった途端、健吾君がピタツと足を止め振り向いた。

「？」

少し背をかがめてきた、チョットちよつと、この体勢は……
もしかして、キスですか？ ハグですか？

どっちもOKだけど、待てよ！ でも、ここ往来よ。

それも、この角の家は、口のうるさいおじいちゃんが住んでいるの
に……。

「芹香、カワイイ」

その後に、優しく【チュッ】って……。

キヤーー、もしかして、今日の浴衣姿、ヒットだったのね！

それなら、この後の夏祭りデート、私が場外ホームランにしてあげ
るね！

夏祭りといえば浴衣でしょ!。。。 S15 (後書き)

何を思ったのか、急に更新です。

(何を思ったかは、活動報告にて・・・!)

お気に入りに入れて下さっている方。

気づいてくれてましたか?

まだ、辛抱強く待って下さってますか?

読んで頂けたら嬉しいです。

浴衣は違反だろ!。。。 K15

芹香の地元での、毎年恒例の夏祭り。

よぼよぼのじいさんから、生まれたての赤ん坊まで、

その地域の住民全員が集うんじゃないかって思えるぐらいの大きな夏祭り。

こんな事、周知の事実なんだから、泥棒の稼ぎ時では?

心配してしまう俺は、小心者なんだろうか?

芹香が、あの大きな瞳をくるくるさせて、

拳を演歌歌手のように握りしめ、俺に迫ってきた。

「ねえ。行かない? 行きたい! 行く? 絶対に行こうよ!」

何だ。それ?

もしかして、【か・き・く・く・け・・・】・・・この間習った古文の四段活用か?

芹香のデートのお誘いを断るなんてもつての外だ。

もちろん、俺に異存はない。

ようやく涼しくなりかけた頃、芹香の家のインターフォンを鳴らす。

「は〜い」

家の中から大きな芹香の返事が聞こえた。相変わらず、このくそ暑いのに元気だな〜。

ドキーン！！！！

心臓をぶち抜かれた音がした。

やられた！

期待していたのは事実だ。

芹香なら絶対にそう来ると思っていた。

だが、実際に目になると、ソリヤ違反だろ！ってなもんだ。

髪をフワフワと頭の上で束ねると、芹香の首の細さが強調される。

白地に朝顔の浴衣が清楚だし、足元の下駄の鼻緒が赤いのも可愛い
が、

それに加えて、いつもはお目にかかれない足のペデュキユアがそそ
る。

これ、鼻血もんだぜ！

ギョギョギョ！

後ろにいるのは、姉ちゃんか？

《遠慮なく値踏みしますね》って目で見ている。

ここは、少しはいい印象与えておかねば……。

「こんばんは」

「芹香の姉です」

ひょえ〜、怖え！

暗に、『分かつているわよね』的な目で、釘を刺された。

ハイ！ わかつてます！

今日は浴衣という事もあるので、充分自重します。

手を繋いで角を曲がる。

やっと、あの怖え姉ちゃんの視界から逃れられた。

さっとあたりに視線をやり、今だ！と【チュツ】とさせて頂きました。

う〜ん、ご馳走様でした。

芹香は顔を真っ赤にしながらも、満面の笑顔だ

その顔はおかしいくらい、満足気なんだけど、何でだろう？

カラコ口と芹香の下駄の音の響きが、楽しい。

先生の事、友達の事、学校の事、芹香は本当に口が疲れないかというくらい

機関銃のように言葉を繰り出し、楽しそうに話す。

俺がたまにチャチャいれると、それはそれは楽しそうに返してくる。

ホント、俺の彼女はメチャクチャ可愛い！

うわ！ この人の多さは何だ！
露店が並ぶその道々に人が溢れかえっている。

お面にスーパーボールすくい、ヨーヨーに射的、
金魚すくいは絶対だな。

さあて、どれにすつかなく？

「健吾君あれ食べよ。あれ！」

クイクイと繋いでいた手をひっぱられ、目的のお店の前に立つ。

「熱々の大きい袋一つ」

カステラボールか！

これ、熱々が美味いんだよね。

甘いのが苦手な俺でも、熱々ならイケル。

「健吾君、これ食べよ！」

次はたこ焼きだな！

屋台の王道だ！

「健吾君。これも食べたい」

今度はおでんか？

夏の暑いときでも、祭りで食うおでんは絶品！

「やっぱ、これは食べなきゃデシヨ」

かき氷か。ブルーハワイは少し邪道じゃね？

「これも外せないね」・・・次は焼き鳥ね。

「ここに来たからにはこれを食べずして帰れないわ」・・・今度

はリンゴ飴。

「うーん、この焼けたソースがたまらないのよね」・・・いか焼きも、いきますか？

「ラムネのビー玉ってうまく取れないから、つついがんばっちゃうのよね」

・・・ここまで来て炭酸、

飲めるとは！

「健吾君？どうしたの？」

芹香、お前の胃袋ってブラックホールだったのね。

俺は、自分の胃袋の重さに敗戦投手の様にたまたで、すでにノックアウト状態だ。

浴衣は違反だろ！。。。。 K15（後書き）

ただのイチヤイチャです。

この夏の暑い時に、見ている、羨ましく、なおかつ暑苦しい
高校生デートを書いてみたかったです。（エへへ・・・！）

ホニヤホニヤ？の書き物をお読み頂いた方、
お気に入りに入れて頂いた方、ありがとうございます。

もう少しだけ、夏祭り編、続く予定です。

目撃者たち……その1&その2

目撃者 その1 由利視線

毎年、必ず一人身女の輪で、訪れていた夏祭り。
今年は、芹香が抜けた。

やっとできたハツカレだ。

私としては、あの腹黒男は我慢ならないけど、あれだけ毎日が嬉し
樂しの

芹香の顔を見ていると、無下に反対は出来ない。

キット今日も、一緒に来ているんだろうな。

おーーと、発見。

山科って、無駄に背え高いからすぐに見つかるんだよね。

おーおー、芹香のあの嬉しそうな顔！

ただでさえ、お祭りって言うだけで、テンションあがるのに、
彼氏と来るのは、初めてだものね。

それでも、気合い入ってる！ 入りすぎだろ！

見たことない浴衣。 キット、姉の綾香さんが新調してやったんだろっ！

あの完璧な髪の毛。 キット、姉の綾香さんが腕によりをかけたんだろっ！

親代わりでもある綾香さんは、口は悪いが芹香に甘すぎる！

ホラホラ、周りの男がチラチラ、芹香を見ていて、山科がそれを威嚇しながら、

手をしっかりと繋いで、縄張りを主張中ね！

いけすかない奴だけど、チョット笑える！

おーーと、ついに目的地に到着ですか？

まずはカステラボールから行くのね。

次はたこ焼き！ 歯に青海苔、気をつけるよ！

おでんは、危険でしょ。 芹香、あんたネコ舌じゃなかった！

焼き鳥はかぶりつくのか！

リンゴ飴、最後のポロリを注意だぞ！

芹香・・・芹香・・・あんた・・・まだ、食べるの？

一応、今日は、デートでしょ！

最後にラムネの瓶、カラカラポンポンさせて、ビー玉取るのに必死でどっすんだ！

さすがの、山科、ただでさえ表情の起伏がないのに、固まっているといっても過言ではない。

それに、芹香が全て食べれる訳じゃないから、要らなくなると、ニッコリ笑って山科に食べさせている。

キツト、山科はその可愛い笑顔を見ながら、「こいつ悪魔かよ」「って思ってるに違いない！

芹香の行動は、毎年の私達と一緒にいる時と同じだった。

例年なら、女子数名でシェアして食べている、その食い物が、今年は、ほとんどが、山科の腹ん中におさまっている。

笑える。本当に、笑える。

でも偉いよ！

山科、あんたって偉いよ！

初めて、見直した！

その二人の光景は、まるで、アン　ンマンのドキンちゃんとバイ　マンみたいだ。

我儘だけど可愛い芹香に、困りつつも許して応えてしまうへタレな山科。

いやいや、度量が大きいと言っておこつ。

しょうがないけど、譲ってあげるわ。

今まで、私が芹香を守ってきたけど、山科にその役を譲ってあげる。

ありがたく、受け取んなさい！

たとえば、次の日に、胃薬のお世話になろうとも、本望でしょ！

目撃者 その2 津田沼視線。

なんで、夏祭りに、弟妹ひきつれて俺は、ここを歩いているんだ？

「ねえねえ 兄ちゃん、かき氷食べたい」

「たこ焼きがいい」

年のはなれた弟と妹はそりゃ可愛いが、何で青春まつただ中の俺がこの二人と
両手を繋いで祭りにこなあかのや！

周りはキャピキャピとバカカップルがこれでもかといチャイチャしてやがるし、
明らかに俺より年上だろうっていう屋台の兄ちゃんが気の毒そうに
言いやがる。

「お嬢ちゃんたち、今日はお父さんとか？ お母さんには逃げられたのか？」

それなら、おまけしとくからな！」

だれが、『お父さん』だ！

確かに甚平をきた俺は、年以上に貫禄があるように見えるのは、否定しないが、

俺はまだ、18歳だぞ！

およよ？

少し奥まった花壇に項垂れて座っている男がいるじゃないか？

この夏祭りに振られたか？

ケケケ！

イイネ。イイネ。

哀愁漂う男の項垂れた姿は！

あれは！ 山科？

何、項垂れちゃってんだよ！

おまえひとりか？ 芹香ちゃんはどうした？

「山科」

「……おう、津田沼……」

青白くさせた顔で、山科の声には力がなかった。

「一人か？」

「……」

「どうした？」

「……芹香に……」

「ついに、振られたか？」

「……」

「やっぱ、お前に芹香ちゃんもつたいたいと思ってたんだよな。とうとう、だめになったか？ 落ち込むことないさ。振られて辛いのは分かるが、

一時でも芹香ちゃんとき合えたんだ。お前の一生の勲章になるぞ！こんな所でへたり込んでてもしょうがないだろ！俺たちと一緒に祭り、楽しもうぜ！」

「……津田沼……」

「これ、俺の弟と妹。可愛いだろ？ あ！でも、妹には手え出すなよ」

「……津田沼……」

山科は、首をフリフリ、まだ、顔色が悪い。振られたシヨックがやはり大きいのだろう。

「よし！ 一緒に行こうぜ。まず、何から食べる？」

俺は、グルツと見渡した。

あれれ、少し先に屋台連が途絶えた所で、^{タチ}達の悪そうな男どもに女の子たちが囲まれているじゃないか？

良く良く見ると、俺の学校の近藤達のグループだ。

近藤って、毒舌だが、こうやってみると結構イケてるよな！

その横には、おお！ 芹香ちゃん！

うほー。浴衣姿でチョー可愛い！ 涎ものだぜ！

あの男たちは知り合いか？

芹香ちゃんが困った様に首を振る！

近藤が、いつもよりも眉間に皺を寄せて、男たちを睨んでいる！

あれって、もしかして？

「なあ、山科。あそこにいるの芹香ちゃん達か？」
「ん？」

山科は、すつくと立ち上がり、視線を走らせた。

「もしかして絡まれてるのか？」

キツト山科は、俺の言葉は聞こえていなかっただろう。
芹香ちゃんの姿を確認するなり、さつきまでの頂垂れていた山科が、急にヒーローの如く駆け出して行った。

あらあら、振られたんじゃないのかよ。
チエツ！

とりあえず、俺も行きましようかね。

でも、俺の気のせい？

山科の走る後ろ姿がヨタっているように見えるのは……………。

健吾君が急に気分悪くなったみたい。

「大丈夫?」

顔色も悪い。

食べたものに当たったのかしら?

「お水買ってくるね。そこに座って待ってて。」

健吾君を人の邪魔にならないように、少し奥まった花壇のブロックに座らせて

又、人込みの中に戻った。

健吾君が心配で、少しでも早く彼の所に戻ろうと、チョット前方不注意だったのが、
いけなかったのか、思わず、前から歩いてきた人と、モロにぶつかった。

「ごめんなさい」

うあ、柄の悪そうなお兄さん達・・・。

「いいよいいよ。彼女一人?」

「君、メツチャ可愛いよね」

「ぶつかったのも何かの縁だ。一緒に祭りいかねえ？」

この人たち何言ってるの？

「いいえ。友達と一緒になので。」

「それって女の子？ その子たちと一緒にでもいいよ？ 呼んでおい
て」

「お兄さん達が楽しい事教えてあげるからさ」

いやらしい笑いを浮かべながら、アルコール臭い息が気持ち悪い！

ペットボトルを持った手をギュッと握られた。
ゾワゾワってして、とっさに言葉がでない。

あ〜ん、どうしよう。

健吾君を呼ぼうにも、彼の姿は見えないし、これだけ人が多いと大
声で叫ぶのも恥ずかし。

どうしたらいい？

健吾く〜ん。

「芹香じゃん。どうしたの？」

ああ。。。由利！

天の助け！

由利の背中から後光が射して見える！

「お！ この彼女の友達？ いま、一緒に楽しむことになったんだ

よね。

彼女たちも一緒にどう?」

「一緒にって?」

違う違うよ! 私は断然、Noと首を振った。

「芹香。行くよ」

「チョット待った! この子、俺たちにぶつかってきたんだよね。それも、すげえ、勢いで。そのお詫びにチョット付きあってもらおうかと思ってたんだ。」

「そんな必要はないですけど」

「いや、俺たちを少しだけ楽しませてくれたらいいだけなんだ」

柄の悪いお兄さんは、さつきからいやらしい笑いを浮かべたまま。

女の子たちだけだからって、きつと、舐めてるんだ。よゝし、それなら!

「彼氏と来てるんで! 一緒には行けません!」

フン! 言ってやったわ!

「彼氏? どこに? もし、それが本当なら、その彼氏にもお兄さん達が説明してあげるよ。」

彼女は、俺たちと回りますってね! だから「

掴んでいた手をぐっと引つ張られた。

下駄がぐらついて、おもわず、そのアルコール臭いお兄さんの胸に引き寄せられる。

うえ〜気持ち悪い！

健吾く〜ン！ もう、泣きそう！

「芹香！」

ああ、健吾君の声だ。

遅いよ！ お姫様がこんなに待ち望んでから来るなんて、遅すぎるよ！

での、あの顔色の悪さじゃどうみても、ヒーローには見えない。

何気にふらついているし……。

本当、かなり重症みたい。

大丈夫？

健吾君の顔を見て、由利もコレヤだめだって顔をしているし……。

あれ？ 後ろから幼子の手を引いてやってきたのは、石ちゃん？

この集まったメンバーの複雑さに、頭がパンクしそう！
どうなるの？

健吾君、どうでもいいけど助けて！ お願い！

ああ、健吾君、今にも吐きそうだわ！

口元に手を当てている。

ああ、心配……。

「おまえが、この可愛い彼女の彼氏？」

「似合ってるねえな」

「おまえ、もうビビってるのかよ。顔色蒼いよ。」

「彼女、俺たちとこの後、楽しむから、真面目君はお家へ帰んな！」

健吾君、何とか言ってる！

口元に手を当てたまま、黙ってるなんて！

よっぽど気分悪いんだわ！

「山科。早く芹香ちゃん何とかしてあげろよ？ 可哀そうに怯えてんじゃん」

あら？ 石ちゃん、いい事言ってくれるじゃない！

手を引いているのは、もしかして、隠し子？

いやいや、そんな事あるはずないか？

お兄さんたちが馬鹿にしたように石ちゃんを見下している。

うう！ 危険！

お兄さんたち、その態度、危険すぎる！

「いや、お父さん。この場合は若者で解決するので、

怪我しないうちに、子供を連れて帰った方がいいよ」

わあ——石ちゃんに向かってなんてこと言うの！

きゃ——石ちゃんの顔が、見る見るうちに柔道部主将の顔になっていく。

怖い！ 怖すぎる……。

学校の柔道部^{うで}つてメツチャ強いんだよね。

その部の主将だよ！

石ちゃん、他の学校から、『高校に石塚あり！』って恐れられ
てるんだから！

でも、石塚って……。

彼の本名は津田沼なのに……。

おお！石ちゃん、ニヤツと笑ったわね。

やってやる！そんな微笑みだわ！

この場は、あんに任す。

エイ！ヤー！ってあつという間にこの場を納めてね！

「山科。やっちゃいな！」

え？ それって？ 健吾君任せ？

大丈夫?。。。。 S 1 6 (後書き)

健吾のキャラがどんどん崩れていきます。。。。
こんなはずではなかったのに。。。。

夏祭りバージョン、もう少し続きます。

よろしければ、お付き合い頂けると嬉しいです。

マジ？ おれですか？。。。。 K16

うえー、気分悪い。

芹香のお願いビームにやられて、いいかっこし過ぎた。

食べ過ぎなうえに、甘い甘いリンゴ飴の飴の部分を食べさせられ、中のビー玉が取りたいからと、炭酸をがぶ飲みさせられ、もう、今にも胃袋から逆流して来そうだ。

芹香は、責任を感じているのだろう。

さっきから、あのおっきなまん丸眼を心配そうに曇らせている。

ここで、お前のせいじゃないって言ってやればいいのだろうけど、口を開くとおでんのちくわが口から出てきそうで怖い。

「お水買ってくるね」

あの赤い鼻緒の下駄をカラコ口慌てたように慣らし、人込みに消えていった。

目え離すのは少し心配だったが、すぐに水を手に戻ってくるだろう。

「山科！」

こんな弱っている状態の俺を、平気で呼べるのは、あいつしかない。

「……津田沼……」

津田沼が勝手な解釈で俺の心配をしてくれているようだが、自分の心配しろって。

甚平に雪駄を履いて、両手には、お前によく似た幼子。

その姿、どうみても38歳、子持ちバツイチとしか見えないぞ！

いつもの俺なら、がんと言い返してやるんだが、
いかんせん、体調悪すぎ！

津田沼、お前のそのだみ声が腹に響いて余計気分が悪くなってきた
だろう。

「あれって、芹香ちゃん？」

そのだみ声の調子で、芹香にただ事じゃない事が起こったと分かる。

俺はすつくと立ち上がったつもりだったが、2・3歩ふらついてい
たかもしれん。

芹香を指してダッシュしたつもりだったが、かなり蛇行していた
かもしれん。

ニヤケタ顔で、芹香の手を握っていた。

許せねえ！

どうしてくれるよう！

「健吾君」

『おいおい、人相の悪いあんちゃん達、芹香から手を離せ』
そう言いたかったのは、山々だが、走ったおかげで、冷や汗まで出てきた。

うわ！ 吐き気を抑えるのが精いっぱい！

芹香の横で、近藤が『情けないわね』って冷めた目で俺を見る。

近藤！

この俺は、いつもの俺じゃないんだ！

お前だって、去年まで毎年、芹香と祭りに行ってたんだろ！

この状態を察して、少しは情けをかけるよ！

柄の悪い奴らは、人を馬鹿にしたように、いい気になって、笑ってる。

勝手に言ってる。

それより、芹香を早く取り戻さなければ……。

悠々と津田沼がやってきた。

両手にはしっかりと、幼子の手を握っている。

津田沼をみて、そいつらは、やはりニヤつきながら、命知らずな事を言っただけだ。

『お父さん』って……。

あんちゃん達のいう事ももともただけだ、それをいっちゃあ、お終いだろ！

津田沼の目が、殺気立った。

頼むぞ！

お前なら、あんな2流のチンピラ、朝飯前で、3秒で1本だろ！

津田沼が、ニヤツと笑った。

さあ、最初の技は、大外刈りか？ それとも内又か？

俺は口から食べ物が出ようとしているのを、辛うじて手で押さえ、津田沼の次の行動を期待しつつ待った。

「山科！ やっっちゃって！」

え？ 俺ですか？

ご指名頂くとは思ってもみませんでした。

マジ？ おれですか？。。。 K16（後書き）

早くしないと、夏が終わってしまう！

その前には、夏祭り編、終わらす予定です！

良ければお立ち寄りくださいね！

傍観者たち。。。。その1&その2

その1 石ちゃん視線

山科って、やっぱりやる時はやる男だね。
きっちり決めてくれちゃったさ。

俺が手出しする必要なのは分かってたが、チョット奴に花を持たせ過ぎたかも。
少し面白くない気分だ！

山科は青白い顔で、口元を押さえながらフラリとそのチンピラ達の前立ちはだかり、
芹香ちゃんの手をグイッと引つ張った。

チンピラ達の一人が、急な山科の行動に少し焦ったような顔で、
山科めがけて突きを繰り出したと思ったら、山科はそれを難なく交わし、
相手の胸に膝蹴りを入れやがった。

もちろんその蹴りは当たっていない。
寸止めだ。

それは確かなのに、あまりの早さと迫力に、まるで本当に蹴られたかのように

チンピラの兄ちゃんはよろよろと尻もちをつく。

まあ、奴の蹴りを本当に受けたら、のた打ち回っているだろうけど・
。。。

情けねえな。

さっきの勢いはどこへやらって感じた。

そして、横で見ていたもう一人の兄ちゃんが驚きながらも【なめん
なよ】と叫びながら

(これはよくドラマでもみるパターンだ！ 犬死に覚悟か?)
山科に拳を振り上げるも、山科は体を屈めその拳をよけながら、
今度は突きを相手の胸に当たる寸前で止めた。

その兄ちゃんも顔を真っ青にさせながらフラフラと後ずさった。

あゝあ、これで勝負あったな。

もう少し、やってくれるかと思っただが、
まあ、ここらでやめておくという賢さだけはあったみたいで、
そいつの横でまだ、尻もちついたままの仲間の男を引きずりながら、
あたふたと、その場を逃げ出して行った。

これにて一件落着とその後ろ姿を見送ったのち、横を見ると、
芹香ちゃんがニコニコと山科の汗を拭いてやっている。

「健吾君 助けられてありがと！」

「芹香。大丈夫だったか？ 怪我とかしてないか？」

「大丈夫だよ。健吾君がきつと助けに来てくれると思ったから、全然怖くなかった」

なんだなんだ、この甘々な会話は！

俺だって、やろうと思えばあんなチンピラ2秒でポイのを、山科にええカツコさせてやろうと、あの場を譲ってやったのにお前だけ幸せなのが許せない！

ケ！

この馬鹿カップルを何とかしてくれ！

まあ、でも、山科は自分の体調は二の次で、芹香ちゃんを助ける事が一番だったわけだから、その男意気に免じて許してやらあ！

クイクイと小さな紅葉の様な手が俺を引っ張る。

「お兄ちゃん。あのお姉ちゃんとお兄ちゃん仲良しだね。お兄ちゃんには、あんなお姉ちゃんいないの？」

聞いてくれるな、妹よ！

兄ちゃんだって辛いんだぞ。

その2 由利視線

確信犯か？

わざと油断させてたんだらうか？

意外にも山科は強かった。

あつという間に、相手をビビらせて芹香をその腕の中に抱え込んでいた。

あの真面目一直線の風貌で、ヒョロリと顔色の悪い山科が、敵から反撃もさせずに、追い払ったのだから。

私を始め、遠巻きに見ていたお祭り気分の老若男女も驚きのびっくり眼メチコだ。

あつという間あいだの間も芹香はニコニコと見ていた。

オイオイ、大事な彼氏がチンピラのアンちゃんにやられちゃってもいいの？と

こっちが心配したほどだったけど、きつと、芹香は知ってたんだらう。

山科が絶対に自分を奪還してくれるって。

アンちゃんたちが去った後は、芹香は満面の笑顔で、

山科の額の冷や汗？（これは食べすぎで気分が悪い所を無理に動いたせいだらう）を

キテ ちゃんのハンカチで、拭いていた。

芹香。

もう少し、コマシなハンカチなかったの？

仮にも今日はデートでしょ。

ムードも何にもないわよ！

芹香は親友の私にだって、気を使う奴だ。

でも、山科という芹香を見ると奴に甘え、頼っているのがピンピン感じられる。

なんやかんや言いつつ、お似合いのバカップルになったね。

二人の姿を友人たちと生暖かい目で見てみると、横で女の子の声が聞こえた。

「お兄ちゃん。 あのお姉ちゃんとお兄ちゃん仲良しだね。

お兄ちゃんには、あんなお姉ちゃんいないの？」

妹の鋭い指摘に奴は何と答えるのだろう。

その言葉にがつくりと膝に手をつけている津田沼が少し可哀そうだった。

津田沼よ。

項垂れるな。

きつと、あなたにも幸せは来るわよ。

あの山科にだって来たんだから。

でも、芹香ほどの物好きがその辺にいるとは思えないけどね。

傍観者たち。。。。その1&その2(後書き)

これにて、夏祭り編、終わりです。

恐れていた通り、秋になってしまいました。。。。

ああ、健吾君と迎える初めてのクリスマス！

楽しみ。すっごく楽しみ。メチャクチャ楽しみ！

健吾君と付き合い始めてからクリスマスプレゼントに何を贈るかす
ぐに

考え始めて、検討に検討を重ねた結果、決定したプレゼント！

オフホワイトのざっくりとしたセーターは、少し細みだけど、
しっかり筋肉のついている背の高い健吾君には絶対に似合うはず！

秋の気配が漂い始めてすぐに取り掛かったのに、
解ほどいては編み、少し進んでは間違えて解く。

その繰り返しで少々ウンザリしてきた。

でも絶対手作りをあげるんだから！

*

痛い！

ちょっと、健吾君、教科書で叩かなくってもいいでしょ！

「おーい、芹香。戻ってこい。全然勉強進んでいないぞ」

そうだった。

明後日から始まる期末テストを前に、学校の図書館で健吾君から勉強を

教えてもらっているんだった。

二人で迎えるクリスマスが待ち切れなくて、ちょっとトリップして
いたみたい。

「数学って嫌い！」

「嫌いでも勉強しないと、欠点だったらどうするんだ？」

「だって、この先、絶対に因数分解なんて私には必要ないのに」

「だが、試験はあるだろ？ 欠点取ったら、24日に呼び出されて
補習受けさせられるぞ」

「24日って……イブに？」

「ああ。」

「本当？」

「ああ」

「イブだよ？」

「そうだ。24日、イブに数学の補習をする事は、決定したらし
い」

「えー！ どうしよう……。イブに補習だなんて……。
あんまりだわ。横暴だわ。断固、反対！ 先生に今から文句言っ
てくる！」

本当に、学校の教師って何考えてんだらう？

イブよ！

恋人たちの、ラブラブタイムを邪魔するなんて、言語道断よ！
モテない先生がやかみを込めてその日にしたのに違いないわ！

健吾君は腹立たないのかしら？

この人、何、呑気な顔して座っているんだろ？

イブに私と会えなくてもいい訳？

隣の席でこの目の細い男が、平気な顔で見ると、ムカムカと、ものすごく腹が立ってきた。

「健吾君！ 私とイブを過ごしたくないの？」

「・・・過ごしたいさ・・・」

「私とイブにイチャイチャしたくないの？」

「?・・・したいさ・・・」

「プレゼント交換をしたり、チキンを食べたり、ケーキを食べたりしたくないの？」

「ええ!・・・。そりゃ・・・したいけど？」

「ならなぜ、怒らないの？」

「何怒るんだ？」

「イブに補習をする事をよ！ 私と会えないのよ！」

本当にこんな簡単な事も健吾君たら分からないなんて！だから、真面目君はなっちゃんいないのよ！

「黙って私の後についてきて！」

「何処にだ？」

「職員室に決まってるでしょ！怒鳴りこみに行くのよ！いまこそ、その少林寺の力を示さなくてどうするのよ！宝の持ち腐れってやつになっちゃんうでしょ！」

あら、何？ その呆れた顔は。
こっちがそんな顔したいぐらいなのに！

「芹香。 怒る前に、職員室に怒鳴りこみに行く前に、勉強すればいいだろ？」

「・・・・・・・・」

「テストで欠点取らなければいいだけの話だ」

何言ってるのよ！

誰に言ってるのよ！

それが出来れば、誰も苦勞しないって！

そんなこと言われなくても分かってるわよ！

そして、これ以上私に言わせないでよ！

私、高校に入ってから、数学で平均点さえもとったことないのよ！
致命的に出来ないの。。。。。

クリスマスなのに。。。 S17（後書き）

今度はクリスマスです。

もっと早く、クリスマスバージョンを始めたかったのですが、
イブになってしまいました。

今年の内には終わらせられれば・・・

短めの二人のクリスマスのお話を綴れたら・・・。

お気に入りを外さずにいて下された方。

お時間があれば、お付き合いくださいね。

クリスマスは。。。。 K17

雄々しすぎる。

目の前の芹香が拳を握りしめて立ちあがった。

明後日からの期末テストを前に二人で仲良く一緒に勉強しようと放課後、図書館で隣同士に座って机に向かう。

さっきから芹香は俺の顔をチラチラと見ては、ニヤニヤしている。

うわ！

いくら彼女といえども、少し不気味だ。

これは完全に、ここにいないな。

きつと芹香の事だから、又、夢の中へ走って行っているんだろう。

最初は鉛筆でちょんちょんと、あの小さな柔らかい手の甲をつつく。気づかんぞ。

次は、物差して腕をポンポンと叩いた。

うーん、全く現実の世界に戻って来ない。

しゃあないか。。。。。

最後の手段。角が当たらないようにきをつけて数学の教科書で・

・・・と。

おお。やっと俺の横に戻ってきたか。

さあ、気合いを入れて頑張ろうとばかりに、数学の補習の事を教えてやると、

一気に覚醒したのはいいが、今度は職員室に走って行きそうだ。

俺の気合いの入れ方が悪かったのか？

芹香は何とも、本末転倒な事を言いだした。

おいおい、そりゃ違うだろ。

はいはい、芹香さん。

チヨットチヨット、まずは勉強でしょ。

芹香にもっともな事を言った俺がバカでした。

そう、君の数学は致命的だったんだ。

俺達のクリスマスは25日かな？

俺にとっては願ったり叶ったりだ。

23・24日と少林寺の試合があつてこつちも大忙しで、

その前も練習に打ち込まなきゃいかんし、

芹香とまったりクリスマスは、やっぱ、25日に決定だな。

「なあ。 芹香。 24日は俺も試合があるし、

芹香も補習だろ？ 24日は会うのやめにしてクリスマスは25日にしないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おお！ 芹香、お前って怒った顔もすっげえ可愛い？かも…………。

「ちよつとそれって本気？」

「え？」

「今、何て、言った？」

「…………いや…………24日じゃなくて25日に…………」

「健吾君！ もう一度私の目を見て言ってくれない？」

「…………あ…………あの…………クリスマスは…………」

芹香がいつもならクリリと愛らしい目を、人相が変わって見えるほどぎよろりと音が聞こえるぐらい見開き俺を睨んでいる。

「健吾君は、私のハツカレであり、イマカレよね。」

「…………はい…………」

「私がつつと24日のクリスマスイブデートを夢見てたの知ってる？」

「いや…………そこまでは…………」

「今年こそは小さな頃からの夢が叶うと健吾君と付き合いだしたその日から」

カウントダウンをしていたのに、その日々をどうしてくれるの？」

「…………え？ それはちよつと…………怖いものが…………」

「怖いって？ 彼女がそれほど楽しみにしているのに、

その夢をぶっ潰すって言うの？」

ああ。俺が悪かった。

俺の認識が甘かった。

まだまだ、芹香さんの事をぜんぜんわかってなかったよ。

次に言う言葉は、俺にはこれ残っていなかった。

「24日、試合が終わったらできるだけ早くいくよ。待っていてくれる?」

芹香は、さっきまで綺麗に整えられた眉が鬼のようにつり上がっていたが

俺の言葉を聞くなりニッコリと天使の笑顔を浮かべた。

「うん。早く来てね!」

もしかして、俺って尻に敷かれている?

クリスマスは。。。。 K17 (後書き)

メリークリスマス！

二人のクリスマスは少し暗雲立ち込めるって感じでしょうか？

家族や友人、そして恋人との時間の合間にも、
お立ち寄りいただければ嬉しいです。

もちろん、一人のノンビリクリスマスの方もお待ちしております！

二人のクリスマスは。。。。

S i d e K

うあ、1時間の遅刻だ。

遅れるかもって言っていたけど、やっぱり、心配していた通りだった。

チツクシヨー

携帯繋がんねえ

芹香、携帯出てくれよ。

クソッ 胴着を捨ててしまいたい。

身一つならもっと早く走れるのに。

いくら走っても待ち合わせの場所はまだ先だ。

ああ。

雪まで降ってきた。

本来なら二人でこの雪を見ていたなら、芹香のすごく嬉しそうな笑顔に

チユツと出来たかも知れないのに。。。。

とにかく、急ごう。

とにかく、走ろう。

一分でも一秒でも早く、芹香の元へ。

遅いな。

昨日遅くまでかかってやっとし上げたプレゼント。

綺麗にラッピングも出来たし、早く、早く渡したい！

健吾君、驚いてくれるかな？

喜んでくれるかな？

。昨日の夜更かしが響いて、今日の補習、どれだけ眠かったか……

補習組に来ていたのは、見るからに彼氏も彼女もない奴ばかりだった。

私の顔を見るなり、みんな聞いてくるのは同じ事ばかりでウンザリ！

*

「片平！？ 別れたのか？」

「芹香？ 何でイブに補習受けているの？ 振られたの？」

補習＝破局

そんな数式、全くわかんない。

失礼ね！ ラブラブに決まってるじゃない！

「芹香ちゃんと山科は、これが終わったらデートなんだよな」

おおー。 出ました石ちゃん！

「わあーそうなんだ。 ごめんね。 芹香。 変な事聞いて」

「ううん。 でも、私がここにいたら可笑しかった？」

「そうだよ。 だって、彼氏もちの子たちは、イブにはずっと一緒にいたいからって

死に物狂いで勉強して、みんな補習逃れていたもの」

ガーン

そうだったんだ。

私が死に物狂いで頑張ったのは、セーターだったのに、他の女子たちは、勉強してたんだ。

「まあまあ芹香ちゃん、いいじゃん。 俺たちとイブに勉強ってたのもいい思い出だぜ」

うわ。 石ちゃんの笑顔に、まわりのみんな一瞬でブリザードだ。

はあ、 とにかく今だけは一生懸命、数学に向き合うべきね。

来年のイブにはこのメンバーに合わないように！

S i d e
Y

山科の着信履歴が残っていたのは1時間前だった。

「山科？近藤だけど。電話くれた？」

「近藤！ 頼む！ 芹香探してくれ、！あいつの携帯に繋がらねえ。」

「

何でも待ち合わせに大幅に遅れたらしい。

芹香と連絡が全く取れないそうだ。

待ち合わせの場所と今の山科のいる所では、
まだまだ、時間がかかりそうだ。

電話の向こうの必死な山科の声。

ヌクヌクと温かいコタツを出ていくのは勇気がいるけど
芹香が心細げに待っている姿が身に浮かぶ。

親友としては放っておけない。
しょうがないなあ。

さあ、帽子にマフラー、手袋、完全防備で搜索開始だわ。

あら？ 雪がチラチラし出している。

ハア、傘も必要ね。

S i d e T

あれ？

一目散に帰って行った芹香ちゃんの席に、携帯がポツンと取り残されているではないですか？

俺は家に帰っても仕方ない一人身のダチ連中とのんびりダベッテいたら

バИБが仕切りに鳴っている。

見るつもりはなかったんだけど、ひょい？と覗くと

《健吾君？》

だとさ……。

山科が嬉しそうにニヤつきを隠しながら言ったのを思い出した。

『芹香がさ。待ち合わせはクリスマスツリーの所がいいって言うんだな。』

遅れるかもしれないし、寒いからやめとこうって言ったんだけど、俺がくるのをもみの木の下で待ちたいんだってさ』

あの時の山科の顔を見た時、殺意が湧いたのは俺だけじゃないはずだ。

待ち合わせ場所は、恋人たちのクリスマスの待ち合わせのメッカだ。

持って行ってやるか。

俺っていい友達じゃねえ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9343n/>

告って！

2011年12月26日01時52分発行